

都城市文化財調査報告書第49集

池ノ友遺跡  
(第1次調査)

2000年3月31日

都城市教育委員会

## 序 文

本書は、都城市公園整備事業に伴って、平成5年度に同市教育委員会が実施した池ノ友遺跡の発掘調査

(第1次調査) 報告書であります。

池ノ友遺跡の所在する早水町一帯は、宮崎県指定史跡の祝吉御所跡や沖水古墳などがあり、遺跡の密集

するところとして知られています。今回の調査の結果、弥生時代の集落跡や中世の建物跡・墓などが見つ

かりました。特に弥生時代の土器のなかには遠く瀬戸内地方（伊予・備後地方）からもたらされたものも

含まれており、当時の交流を知る上で大変貴重な資料となりました。

このような成果を記録した本書が、郷土の歴史教育や生涯学習活動の資料として生かされるとともに、

今後の学術研究に少しでも寄与できることを願っています。

最後に、発掘調査に従事していただいた市民の皆様をはじめ、出土資料の整理から報告書作成に至るま

で、ご指導・ご協力いただきました関係各機関、多くの先生方に厚くお礼申し上げます。

2000年3月31日

都城市教育委員会  
教育長 長友久男

## 例　　言

1. 本書は都城市教育委員会が平成5年度に実施した池ノ友遺跡の第1次発掘調査報告書である。
2. 発掘調査地は宮崎県都城市早水町4529番地2ほかである。調査面積は約1,800m<sup>2</sup>である。
3. 本書掲載の遺構・遺物の実測および写真撮影は作業員の協力を得て、都城市教育委員会文化課主事桑畠光博が主として行い、遺跡の空撮は株式会社スカイサーベイに委託した。なお、すべてのトレークスは桑畠があたった。
4. 本書使用のレベルは海拔絶対高であり、基準方位は磁北である。
5. 本書で用いた遺構の略記号は次のとおりである。  
堅穴住居跡=S A  
掘立柱建物跡=S B  
土坑=S C  
溝状遺構=S D  
周溝墓=S K  
周溝状遺構=S L  
ピット=S P  
畝状遺構=S U
6. 本書の執筆は、第1・2・3・5章を桑畠が行い、第4章の自然科学分析結果報告は株式会社古環境研究所に委託した。なお、編集は都城市文化課嘱託原田亜紀子の協力を得て桑畠が行った。
7. 発掘調査および出土遺物の整理にあたっては、下記の方々より指導・助言をいただいた。  
上村俊雄（鹿児島大学）  
山本信夫（太宰府市）  
柳木謙一（松山市埋蔵文化財センター）  
石川悦雄・谷口武範（宮崎県埋蔵文化財センター）
8. 発掘調査におけるすべての記録と出土遺物は都城市立図書館内文化財整理室に保管されている。

## 目 次

### 本文目次

第1章 序説	6
1. 調査に至る経緯	6
2. 調査の組織	6
第2章 位置と環境	6
1. 地形的環境	6
2. 周辺の遺跡	7
第3章 調査の記録	9
1. 調査の経過と概要	9
2. 遺跡の層序	9
3. 弥生時代	12
(1) 遺構と遺物	12
(2) 包含層出土遺物	40
4. 中世	50
(1) 遺構と遺物	50
(2) 包含層出土遺物	57
第4章 自然科学分析	61
1. 出土炭化材の放射性炭素年代測定結果	61
2. 出土炭化材の樹種同定	62
第5章 まとめ	63

### 挿図目次

図1 遺跡位置図	7
図2 遺跡周辺地形図	8
図3 発掘調査区域図	10
図4 弥生時代遺構分布図	11
図5 1号住居跡実測図	12
図6 1号住居跡出土土器実測図	13
図7 2号住居跡実測図	14
図8 2号住居跡出土土器実測図	15
図9 2・3・4号住居跡出土土器実測図	16
図10 3号住居跡実測図	17
図11 4号住居跡実測図	18
図12 5号住居跡実測図	19
図13 5号住居跡出土土器実測図(1)	20
図14 5号住居跡出土土器実測図(2)	21
図15 6号住居跡実測図	22
図16 6・7・8号住居跡出土土器実測図	23

図17	7・8号住居跡および6号土坑実測図	24
図18	9号住居跡実測図	25・26
図19	9号住居跡出土土器実測図（1）	27
図20	9号住居跡出土土器実測図（2）	28
図21	10号住居跡実測図	29
図22	10・11号住居跡出土土器実測図	30
図23	11・12号住居跡実測図	31
図24	1号周溝状遺構実測図	32
図25	2号周溝状遺構実測図	33・34
図26	1・2・3・4号周溝状遺構出土土器実測図	35
図27	3・4号周溝状遺構実測図	36
図28	5・6号周溝状遺構実測図	37
図29	5・6号周溝状遺構出土土器実測図	38
図30	1・2・3・4・5・7号土坑実測図	39
図31	8号土坑実測図	40
図32	1・3・5・7・8号土坑出土土器実測図	41
図33	包含層出土弥生土器実測図	42
図34	弥生時代石器実測図（1）	43
図35	弥生時代石器実測図（2）	44
図36	弥生時代石器実測図（3）	45
図37	中世遺構分布図	49
図38	中世周溝墓実測図	50
図39	中世周溝墓出土遺物実測図	51
図40	掘立柱建物跡実測図	52
図41	ピット内土師器出土状況	52
図42	1号溝状遺構実測図	53
図43	2号溝状遺構実測図	54
図44	3・4号溝状遺構実測図	55
図45	溝状遺構・ピット出土遺物実測図	56
図46	畝状遺構実測図	57
図47	包含層出土土師器・磁器実測図	58
図48	中世石器・石製品実測図	59
図49	弥生時代遺構変遷図	64

## 表 目 次

表1	弥生土器観察表	46
表2	弥生土器観察表	47
表3	弥生土器観察表	48
表4	土師器・磁器観察表	60

## 写 真 目 次

図版1 調査区全景カラー（真上から）	67
図版2 調査区遠景（東上空から）・1号住居跡土層断面	68
図版3 1号住居跡土器出土状況・1号住居跡完掘状況	69
図版4 2号住居跡上層土器出土状況・2号住居跡調査状況	70
図版5 3号住居跡遺物出土状況・3号住居跡完掘状況	71
図版6 4号住居跡完掘状況・5号住居跡遺物出土状況	72
図版7 6号住居跡調査状況・6号住居跡土器出土状況	73
図版8 9号住居跡調査状況・9号住居跡土器出土状況	74
図版9 1号周溝状遺構遺物出土状況・1号周溝状遺構に付属する土坑検出状況	75
図版10 3号周溝状遺構遺物出土状況・4号周溝状遺構完掘状況	76
図版11 中世周溝墓完掘状況・中世周溝墓内土壤遺物出土状況	77
図版12 桜島文明軽石の落ち込み（歛状遺構）・桜島文明軽石直下歛状遺構（軽石除去後）	78
図版13 1号住居跡出土土器	79
図版14 2号住居跡出土土器	80
図版15 5号住居跡出土土器（1）	81
図版16 5号住居跡出土土器（2）・6号住居跡出土土器	82
図版17 9号住居跡出土土器	83
図版18 11号住居跡出土土器・下城式系甕・鋸齒文をもつ壺・瀬戸内系凹線文土器	84
図版19 磨製石器および未製品・砥石・石磨丁・軽石製品	85
図版20 中世周溝墓出土土器・中世周溝墓出土鐵製品と砥石・中世土師器	86
図版21 白磁・染付・滑石製品・軽石製品	87
図版22 5号住居跡炭化材の顕微鏡写真	88

## 第1章 序 説

### 1. 調査に至る経緯

平成5年1月14日付けで都城市都市計画課（現街路公図課）から同市文化課へ、都城市早水町の早水公園整備事業予定地内における文化財所在の有無の照会が出された。当該地区は平成2年度に発掘調査された牟田ノ上遺跡（現サンビア都城敷地内）に隣接しており、遺跡が存在する可能性が高かったため、文化課では、平成5年4月26日から4月27日まで当該地区内の試掘調査を実施した。その結果、設定した13か所のトレーンのうち10か所で遺物が出土し、対象区域の北側から東側にかけて遺物包含層の残存状況が良好であった。また、9か所では構築も検出された。

その後、両課の間で協議を重ねた結果、園路の基礎工事によって掘削される部分と東屋・遊具の設置によって構築・遺物に影響を与える部分については、現状保存が困難であったため、都市計画課からの執行依頼を受けて、文化課が平成5年7月20日から記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

### 2. 調査の組織

発掘調査は都城市教育委員会が主体となり、予算の執行は市文化課があたった。現場における調査を実施した平成5年度の組織および調査体制は以下のとおりである（整理作業員は平成11年度の体制も含む）。

調査責任者 都城市教育長 隈 元 幸 美

調査総括 都城市文化課長 松 山 充

調査事務局 同文化課長補佐 遠 矢 昭 夫

同文化財係長 海 田 茂

調査員 同 主事 横 山 哲 英（試掘調査担当）

同 主事 桑 烟 光 博（本調査担当）

調査指導 宮崎県文化課 主査 石 川 悅 雄

発掘作業員 野口虎男 浜田 寛 永田敏雄 中原貞良 坂元トミ子 藤田フチ子 高橋ヨシ子

高橋ミツ子 南 スミ子 松崎ミエ子 立山君子 岩切ユキ子 宮元孝子 蒲生ミツ子

平川樹高 平川美智子

整理作業員 猪股幸千代 雅野あつ子 池谷香代子 水光弘子 奥 登根子

## 第2章 位置と環境

### 1. 地形的環境

池ノ友遺跡は、宮崎県都城市早水町4529番地2ほかに所在する。

さて、都城市は九州東南部の内陸部に位置し、宮崎県と鹿児島県との県境に接している。地形的には都城盆地のほぼ中央を占めており、東を東岳・柳岳を主峰とするいわゆる鶴塚山系に、西を瓶台山や白鹿岳などの山地に囲まれている。また、盆地中央をほぼ南北方向に流れる大淀川を境として、鶴塚山地の裾部にあたる市域の東側は、緩やかな傾斜を示す扇状地形が認められる。これに対し、西側は比較的起伏の少ない平坦なシラス台地が広がっている。

当遺跡は、大淀川の支流である沖水川と萩原川に囲まれた市域東側の開折扇状地である一万城扇状地の扇尖部に立地している。遺跡の東方約300mには扇状地の地下を流れる伏流水が湧出して形成された早水池があり、そこから北西方向に向かって旧河川と思われる谷状痕跡が認められる。現在はその大部分が埋

め立てられているが、第2次世界大戦前まで谷状地形の底には畠田がつくられていたという。本遺跡はその谷状地形の西側、標高約157mに位置している。

## 2. 周辺の遺跡

池ノ友遺跡では今回報告する第1次調査地点の他に、前節で述べた谷状地形を挟んだ対岸において、平成8年度から平成11年度にかけて第2～5次にわたる発掘調査が実施されている。これら一連の調査はやはり市の公園整備事業に伴うもので、縄文時代早期から近世にかけての幅広い時代の遺構・遺物が発見されている。ところで、縄文時代早期に関しては、平成11年度に民間の福祉施設建設に伴って発掘調査された白山原遺跡でも集石遺構や多彩な石器・土器が見つかっている。同遺跡は池ノ友遺跡北方の現水田面である低湿地にあり、その立地が注目される。前章で述べた牟田ノ上遺跡は池ノ友遺跡の北西約250mにあり、宮崎厚生年金健康福祉センター（サンピア都城）の建設に先立って平成2年度に発掘調査された。調査面積は約12,000m<sup>2</sup>であり、遺構・遺物は主として弥生時代後期～古墳時代初頭・中世の各時期のものが発掘されている。池ノ友遺跡の東方約350mにある早水神社には境内に宮崎県指定の神水2号墳（昭和11年指定）があり、その墳丘から出土したとされる経筒と湖州鏡が伝わっている。さらにその北400mには島津氏初代の惟宗忠久の居館跡とされている宮崎県指定の祝吉御所跡がある。一帯には中世の遺構・遺物が高密度で検出された天神原遺跡や桙山郡元遺跡などもあり、中世以降の開発の拠点と目されている。



図1 遺跡位置図



図2 遺跡周辺地形図

## 第3章 調査の記録

### 1. 調査の経過と概要

発掘調査は、園路の基礎工事によって掘削される開発予定地の北側部分と東屋・コンビネーション道具の設置される西側および南側の部分に分けて実施した。したがって調査区域が大きく3地点に分散するかたちとなった。現場における調査中、当初はその3地点を便宜上北からA区・B区・C区としていたが、最終的に公共座標系（S N線）にあわせて開発対象地全域に10m四方を単位としたグリットを設定し、東西方向を西からアルファベットでA・B・C…、南北方向を北から算用数字で1・2・3…とし、その組合わせで各グリットを呼称することになった（例えばA-1区など）。そこで本報告ではこのグリット名との混亂を避けるため、先の3地点を北からⅠ地区・Ⅱ地区・Ⅲ地区と読み替える。調査面積は全体で約1800m<sup>2</sup>である。調査期間は平成5年の7月20日から10月15日までであるが、この年は、7月から9月にかけて例年になく雨と台風が続いたため、調査区の北半部が何度も水没し、作業の進行がかなり阻害された。また、遺構・遺物の密度が高かったことも影響し、予定期間の1.5ヶ月間を大幅に超過し、3ヶ月間を費やす結果となった。

さて、試掘調査の結果からも、都城市が買収する以前にここにあった石油備蓄槽や事務所・倉庫施設の基礎によってかなり破壊されていることが想定されていた。実際、重機によって表土層を剥ぎ取った際、Ⅰ地区やⅡ地区においては填圧されたシラスと礫層（約20cm）をはじめ、コンクリートの布基礎やゴミ穴なども認められた。しかし、擾乱を受けていない部分では、シラスと礫の整地層を剥ぎ取ると、下位に黒色系土（Ⅲ層）が良好に堆積していた。したがってそこからは入力で掘り下げ、遺物の検出に努め、さらに20~30cm下の霧島御池軽石層（Ⅳ層）の上面で遺構を検出した。一方、木造一階建の家屋があったⅢ地区は、重機によって表土と旧耕作土？（約40cm）を剥ぎ取ると、それ以下に桜島文明軽石（15世紀後半）が部分的に残存していた。いったん、人力によりその面でそろえたところ、同軽石が筋状に堆積した状況（筋状？）をとらえることができた。さらに、その下の黒色系土（Ⅲ層）を人力で掘り下げ、霧島御池軽石層（Ⅳ層）の上面で再び遺構を検出した。

調査の結果、弥生時代の竪穴住居跡12棟・周溝状造構5基・土坑8基と土器・石器、そして、中世の獨立柱建物跡3棟・溝状造構4条・周溝墓1基・土坑16基・ピット多数と土師器・磁器・鉄製品・石製品などが確認された。

### 2. 遺跡の層序

遺跡の基本層序は、Ⅰ地区に顯著なシラス・礫の整地層を除くと、Ⅰ層：灰色砂質土、Ⅱ層：灰黑色砂質土（旧焼成土？）、Ⅲ層：黒色弱粘質シルト土、Ⅳ層：霧島御池軽石（約4200年前）、Ⅴ層：黒色粘質シルト、Ⅵ層：鬼界アカホヤ火山灰（約6300年前）という順で堆積する。

上記のうち、調査を実施したのはⅣ層上面までである。

なお、独立した層序番号をとらなかったが、前節で述べたように、Ⅲ地区においては、Ⅱ層とⅢ層の間に部分的に桜島文明軽石（15世紀後半）が認められた。また、Ⅲ層は霧島御池軽石の上方への散乱と思われる黄色軽石粒（数mm以下の粒子）の含み具合により、次のように細分できる。Ⅲa層：黄色軽石を微量含む。削ると光沢あり。Ⅲb層：黄色軽石をまんべんなく含む。削るとややザラつきあり。Ⅲc層：黄色軽石を多量含み、全体にかたぐるまる。霧島御池軽石へのいわゆる漸移層である。だいたい中世の遺構に堆積する土層はⅢa層に該当する。他方、弥生時代の遺構内堆積土はⅢb層に対応すると思われるが、軽石粒の大きさや含み具合などをみるとそのものとは言い切れない。ちなみに、Ⅰ地区北側における所見であるが、弥生土器の大きな破片は、おおむねⅢb層の上半に集中して出土した。

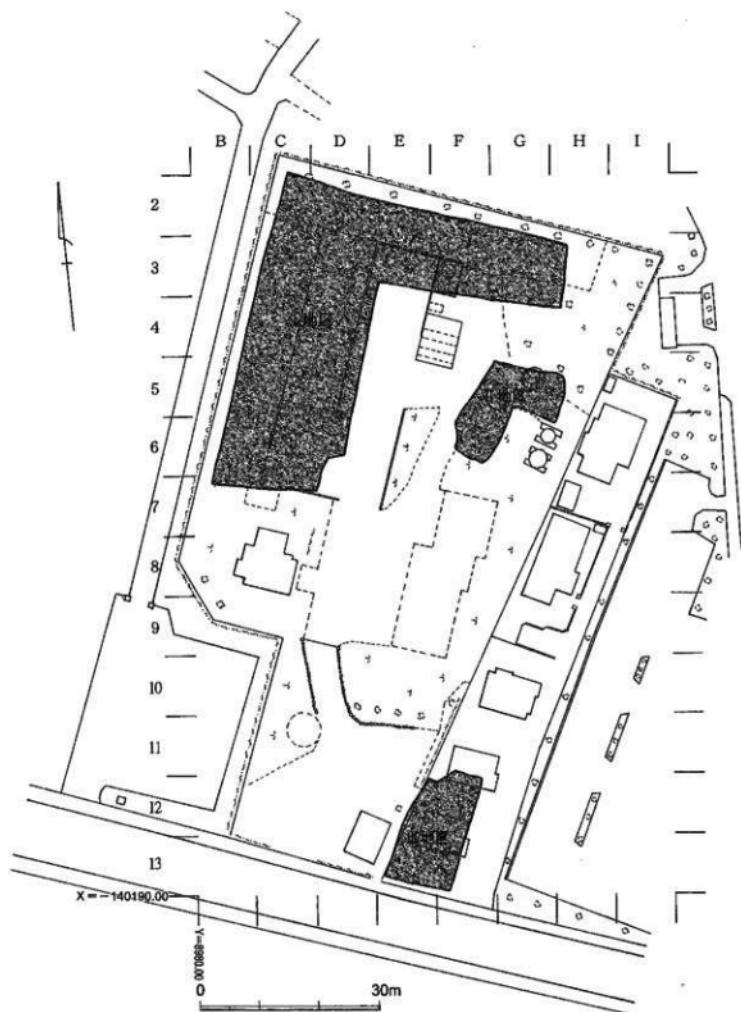


図3 発掘調査区域図

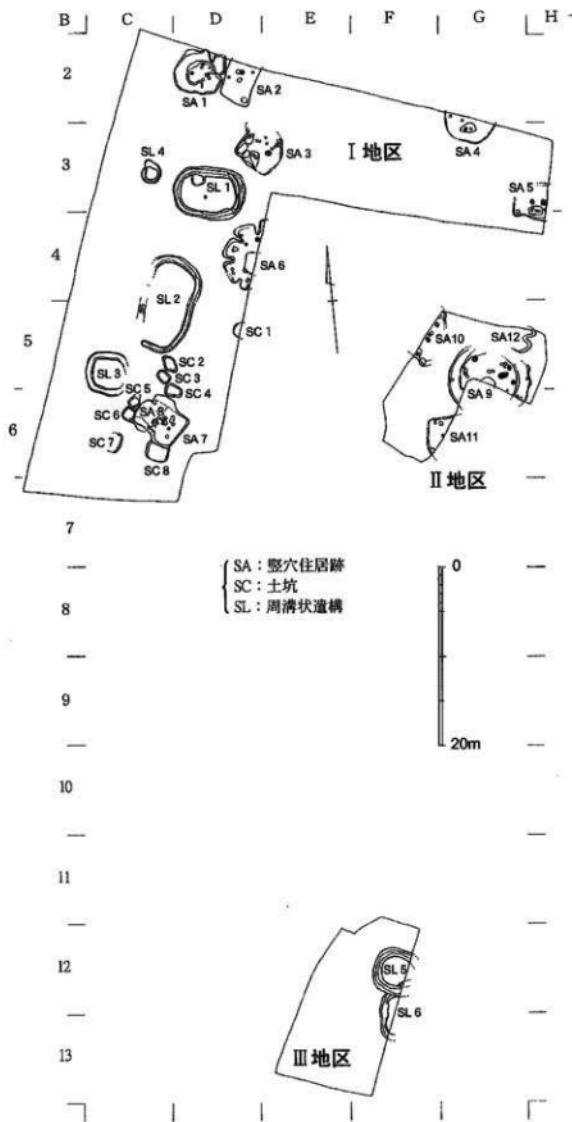


図 4 新石器時代遺構分布図

### 3. 弥生時代

#### (1)遺構と遺物

弥生時代の遺構の分布状況は図4に示した。断片的な情報からではあるが、調査対象地の南半部（Ⅲ地区）は北半部（I・II地区）と比較すると、遺構の密度が粗である可能性が高い。以下、遺構の種類ごとに説明する。

#### 【堅穴住居跡】

##### 1号住居跡（S A 1） 図5・6・34

長軸5.5m・短軸4.7mの隅丸方形状プランの「花弁状住居」である。北東部の2ヶ所に突出壁があり、2.2m×1.4mの方形の空間を作り出している。住居中央部は周囲よりも一段低く、周囲は約10～20cm程度高くなっている。不明瞭なベット状遺構となるが、住居東南部ではその段差がとらえられない。床面はさほ

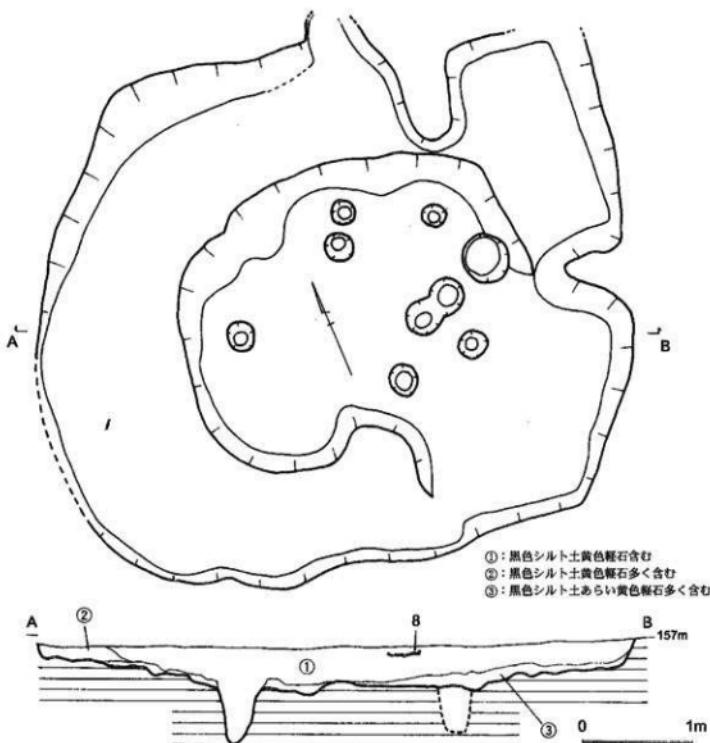


図5 1号住居跡実測図

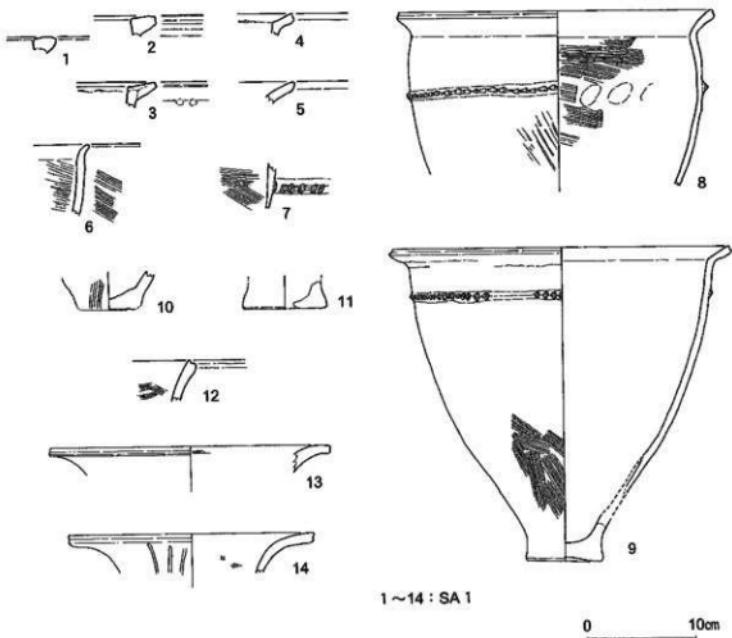


図6 1号住跡出土土器実測図

ど硬化しておらず、貼床の痕跡も認められない。主柱穴は住居の中央部で2基確認され、軸線は東西方向である。そのうちの東側のものは建て替えにより掘り直された可能性がある。他に比較的浅いピットが6基ある。住居内の覆土は3層に区分されるが、遺物の大半は上層(①層)から出土した。中でも完形に復元できる中溝式の壺9やそれに近い8は①層の上部にまとまって出土した。8は口縁部からかなり下がった位置(胴部最大径付近)に突唇があり、刻目は工具で横方向にえぐりとったようにしてつけられている。9の突唇刻目は全周せず、刻目内には原体に巻き付けられていたと思われる布状の圧痕が認められる。14は外面に暗文状のミガキのある広口壺で、③層から出土した。石器は大型の砥石(274・275)と小型の砥石(276)が出土した。

#### 2号住跡(SA 2) 図7・8・9・34

北側は調査区外へと続いたため不明であるが、長軸4.4m以上、短軸3.5mの長方形プランと思われる。窓穴の掘り込みが検出面からかなり浅い(10cm程度)ため、当初は疑問もあったが、北側の中央に主柱穴とみられる深さ75cmのピットを確認し、最終的に竪穴住跡と認定した。住居南東隅にもピットがあり、蓋の底部(20)と広口壺(29)が出土した。遺物はおおむね住居内覆土(①層)の下部で出土している。15

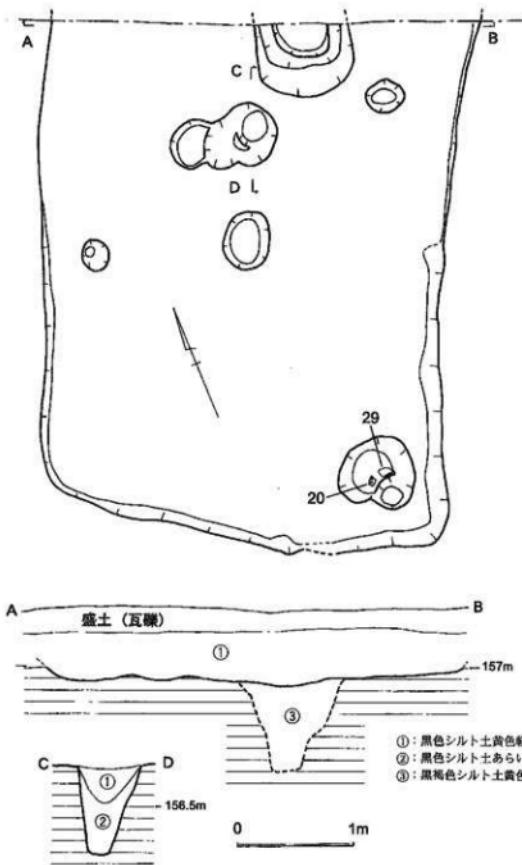


図7 2号住跡実測図

は突堤をもたない「く」の字口縁の甕（以下、無突堤系甕とする）で、ほぼ完存していた。逆L字口縁の甕17や下城式の甕24は床面直上で出土している。一方、甕21・22・23や壺27・30はそれより約20cm程度上位から出土した。石器は砥石の破片（277）と磨石（278）がある。なお調査区外に延びる壁際付近でより古い時期（縄文時代後期以降？）の土坑を切っており、それと同様の覆土をもつ土坑がSAIIの北側でもみつかっている。

### 3号住跡（SA 3） 図9・10

北側と南東部を現代の建物基礎によって破壊されているため、全容が不明であるが、長軸5m・短軸4.5mの隅丸方形プランが想定される。住居南西中央部と南東中央部に主柱とみられる大型のピットが2基あ

り、いずれも内部から根固めの縫も検出されている。ただし両ビットを結んだラインは住居の中心軸とはずれており、疑問が残る。これらのビットより北側の床面は貼床状にかたく締まっている。他に北西壁際に浅い土坑が2基認められる。土器はおむね住居内覆土の下部(①層)、およびビット・土坑(②層)から出土しており、逆L字口縁の甕(34)や下城式の甕(38・39)などが出土している。一方、43の輪先状口縁の甕はそれらより上位から出土した。

4号住居跡(SA4) 図9・11

北側が調査区外へと続くため全容が不明であるが、直径5.7m以上の円形プランが想定される。住居南側

中央に不整形の土坑があり、その内部にビットが2基配置されるが、西側の方が20cmほど浅く、規模が異なっている。両方が主柱となることも考えられるが、住居の中心軸とはずれがあるし、調査区外の住居北側にもビットがある可能性があり、結論は出せない。出土遺物は少なく、甕の破片が少数みられるのみである(46・47)。

5号住居跡(SA5) 図12・13・14・35

北西部隅を中世の溝状構造(SD1)に切られ、東側は調査区外へと続くため、全容は不明であるが、長軸5m?・短軸4.2mの方形プランが想定される。住居の中心付近に2基のビットがあり、主柱と認定できる。その南側には壁と平行するように隅丸方形の土坑(1.5m×0.9m)があり、その内部底面には3基のビットを伴っている。この土坑より北側の床面はかたく締まており、貼床状となる。遺物の大半は住居内覆土の上部(①層)から出土したが、土坑の西側の②層から完形近くに復元できた中溝式の甕(48)が出土した。同タイプの甕は①層からも比較的まとまって出土している(49~60)。これらの口縁部はやや立上がり気味で、屈折部内面の縫はにぶい(48・49・50・55)。突帯の刻目は工具により押圧されたもの(55~59)、横方向にえぐりとられたもの(54)、布状の圧痕を残すもの(48~50・53・60)などがある。出土土器の器種は比較的豊富で、中溝式の甕の他に、72・73などの大甕、三角突帯をもつ甕(75・76)、無頸甕(74)などもみられる。石器は敲石(280)が1点出土した。他に①層の上部からは炭化材もまとまって出土している。そのうち1点は古環境研究所によってネムノキと同定され、炭素年代測定の結果、BP 2010±60という値が得られた(第4章参照)。

6号住居跡(SA6) 図15・16・34

東側が調査区外へと続くため、全容は不明であるが、直径約8mの円形プランを基調とする「花弁状住居」である。現状で確認できる突出壁は3ヶ所であり、南側の現代建物の基礎によって破壊されている部分にもう1ヶ所想定できる。それぞれの突出壁の延長線上に主柱穴が認められるが、北から数えて3番目の突出壁に伴うはずの柱穴は確認できなかった。おそらく現代建物の基礎で破壊されたものと思われる。なお、その突出壁に沿うように台石が残されていた。他に、住居中心からやや南にずれる位置に浅い方形?プランの土坑がある。遺物は造構内覆土(②層)の上部から出土している。土器は中溝式の甕(82~88)、無突帯系の甕(89)と頭部に刻目突帯をもつ甕(90a)がある。中溝式の甕はSA5でみられたものよりも口縁部が短く、屈折部内面の縫もシャープで、全体的にSA1出土土器に近い。突帯の刻目は工具により押圧されたもの(82・83・85・87)と布状の圧痕を残すもの(84)がある。石器は小型の砥石(279)が出土した。

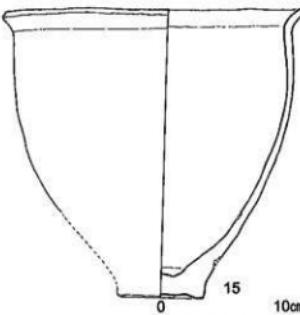


図8 2号住居跡出土土器実測図(1)

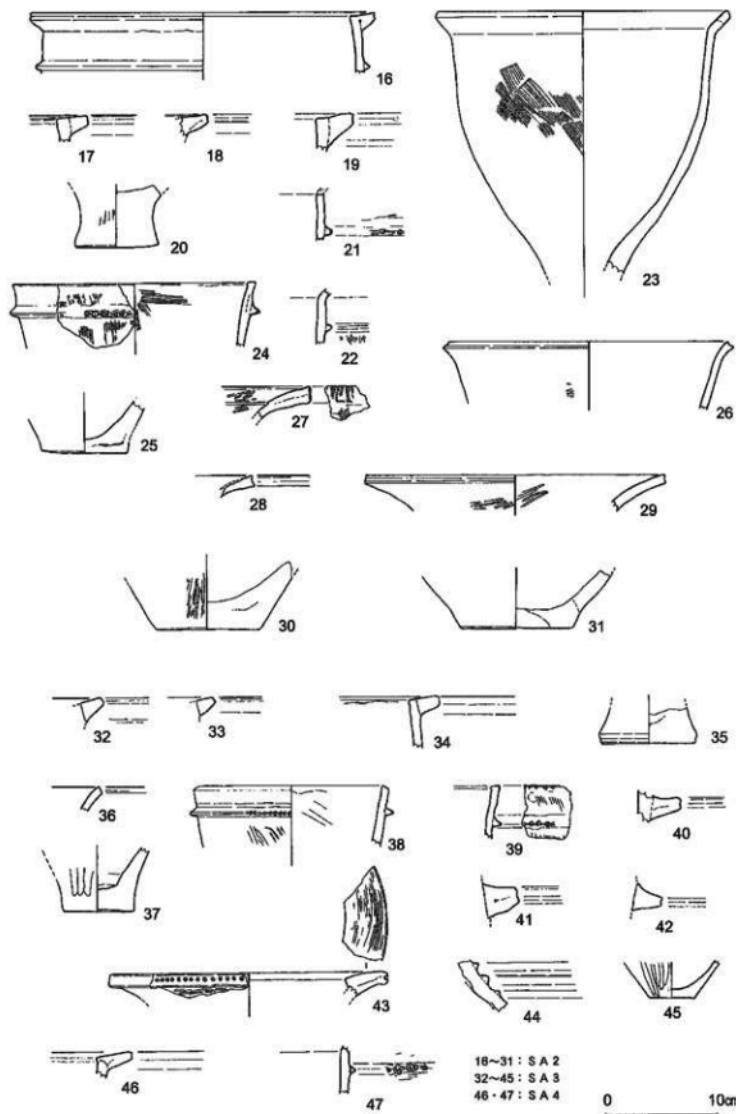


図9 2・3・4号住居跡出土土器実測図(2)

7号住居跡（SA 7）・8号住居跡（SA 8） 図16・17

SA 7とSA 8については、当初の遺構上面の検出の際の土色のぼんやりとした違いによって、前者が後者を切るように見えていた（前者が後者より濃い色合いを呈していた。）が、土層断面観察の段階では両者の切り合いの状況を明瞭に示すことができなかった。しかし、調査を進めると、SA 8の床面にややかたくしまる範囲を面的にとらえることができ、それが、SA 7との境界線で切れていることが判明したため、やはり、SA 7がSA 8を切っているという結論に達した。

SA 7は、長軸4.3m・短軸3.2mの方形プランを基調とするものと思われるが、北西側に突出壁が1ヶ所あり、北側コーナーに振り出し状の空間を作り出している。またその空間の北壁に沿って細長い楕円形の土坑がある。住居の床面は全体にかたく締まっており、約10cm程度の貼床状となっている。突出壁の延長

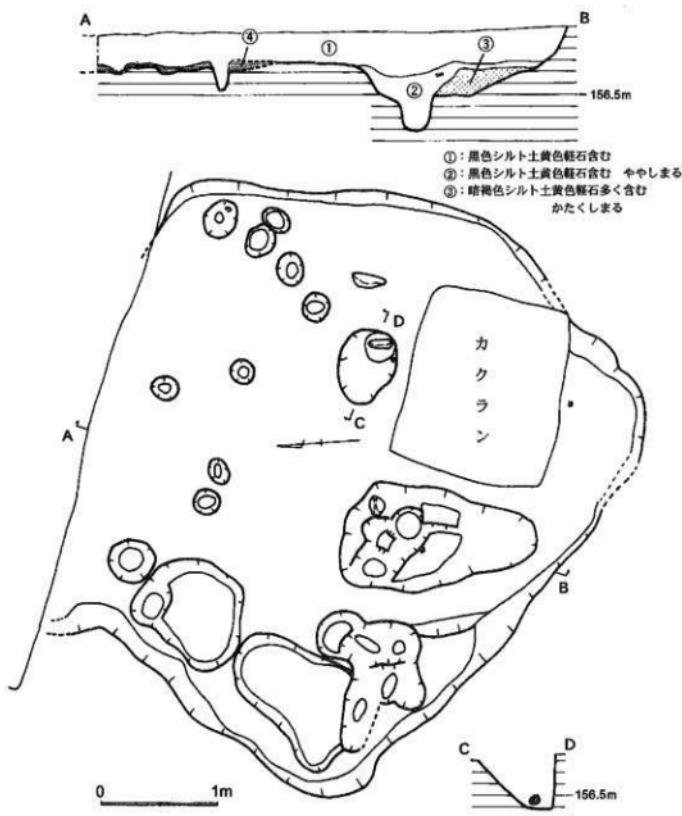


図10 3号住居跡実測図

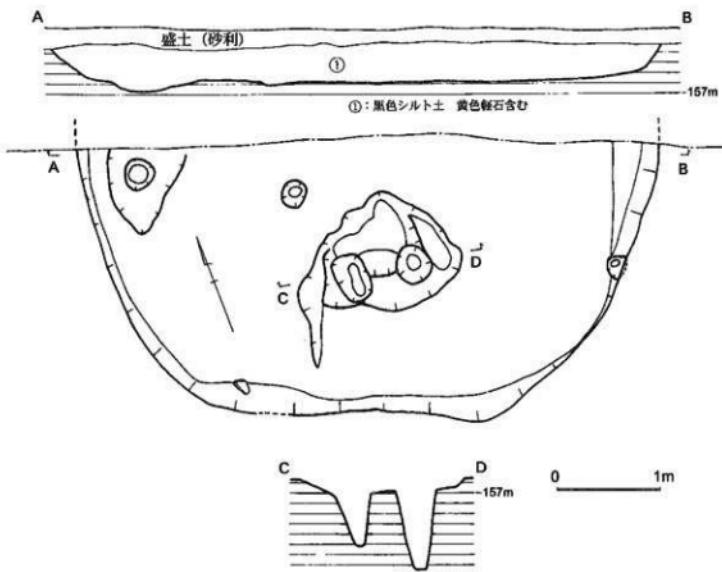


図11 4号住居跡実測図

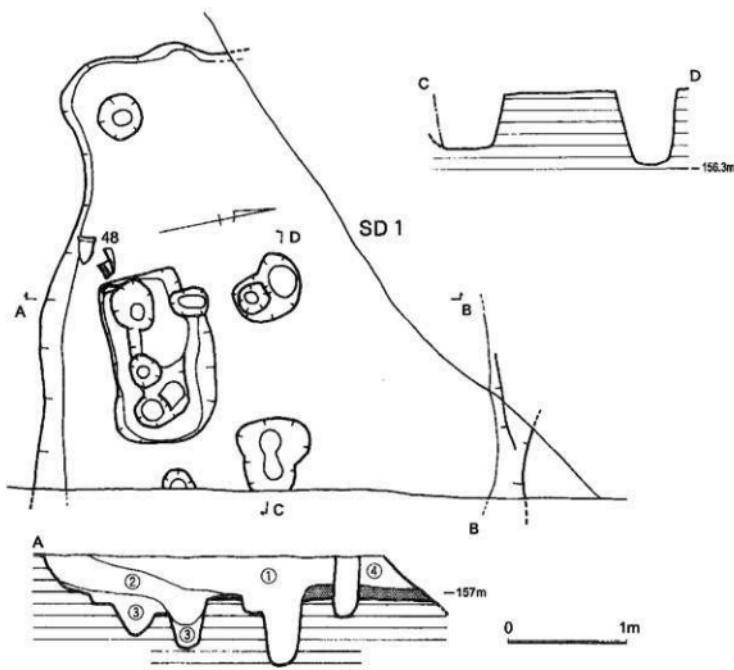
線上に平行して、2基の主柱穴が並んでいる。遺物は土器片が覆土(①層)の上部から若干出土している。逆L字口縁の甕(91~95)や中溝式の甕(102)などがあるが、いずれも小破片である。石器は磨製石鏃の未製品(295)が出土した。なお、住居の南側は堅穴状土坑(SC8)を切っている。

SA8は、3m×3m以上の方形プランが想定されるが、SA7に切られているため詳細は不明である。住居の南壁に沿って細長い楕円形の土坑があり、その南東部底面にはピットが2基伴っている。SA7との境界付近に深さ30cm程度の2基のピットが約1mの間隔をあけて配置されており、それらが主柱穴になるものと考えられる。したがって、SA7の主柱穴による輪縁とは直行する。また先述したようにこのピットを囲むように床面がやや硬化している。出土遺物はSA7と同様少なく、土器破片が若干出土したのみである。無突帯系の甕(105)は楕円形土坑内から出土した。なお、住居の西側隅を土坑6(SC6)によって切られている。

#### 9号住居跡(SA 9) 図18・19・20・35・36

北側が現代の擾乱を受け、南側は調査区外へと続くため、全容は明らかではないが、直径9.3mの円形プランを呈するものと思われる。今回の調査で検出された住居の中では最大規模である。住居の外周に沿って帯状に幅1~1.2mが約20cm程度高くなり、ベット状造構を形成する。その北西部には溝状の土坑が伴っている。ベット状造構に囲まれた内側に現状で5基の主柱穴が確認された。半分しかとらえられていない

が、住居の中央部に土坑がある。床面はかたく締まり、5~10cm程度の貼床が認められる。ベット状造構は南西部のみがかたく締まり、断ち割って観察すると、版築状の硬化層が形成されていた。遺物の多くは遺構内覆土（①層）の比較的下部で出土しているが、床面直上ではなく5~10cm浮いた状態で検出された。土器は胎土にキンウンモを含む逆L字口縁の甕が主体を占める（108~114）。これらの甕の口縁部は台形状突帯を貼り付けることによって形成されるが、突帯が高いもの（109~111・114）と低いもの（108・112・113）がある。132~135のような下城式系の甕も少量認められる。117は特異な甕で、全体に隔壁が厚く、口縁がにく立上がり、突帯もシャープさにかける。甕は垂れ下がりの貼付け口縁をもつ150。広口の口辺部外面に暗文状のミガキ（5本が1セットで4ヶ所にある？）をもつ152。口唇部に刻目をもつ156。口縁部がT字状で脣部にM字状突帯をもつ148などがある。一方、口縁をT字状に肥厚させ、脣部に刻目突帯をもつ甕131・竹管文をもつ甕158・瀬戸内系の凹線文をもつ甕163は①層の上部から出土している。石器は礫石（281）や砥石（282~284）の他に、磨製石器（289~291）が出土しているが、その製作過程の剥片（296・297）も数点出土した。



①: 黒色シルト土黄色軽石含む ②: 黒色シルト土黄色軽石多く含む ③: ②よりも黄色軽石多い ④: 黒褐色シルト土黄色軽石多く含む かたくしまる

図12 5号住居跡実測図

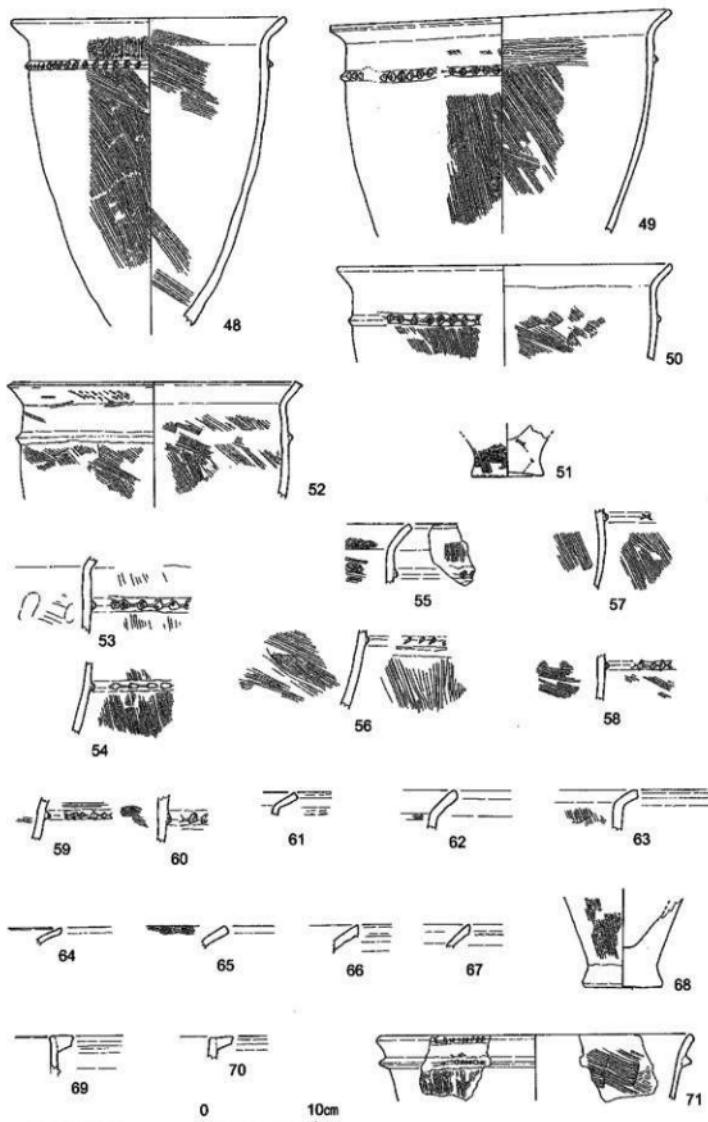


図13 5号住居跡出土土器実測図 (1)

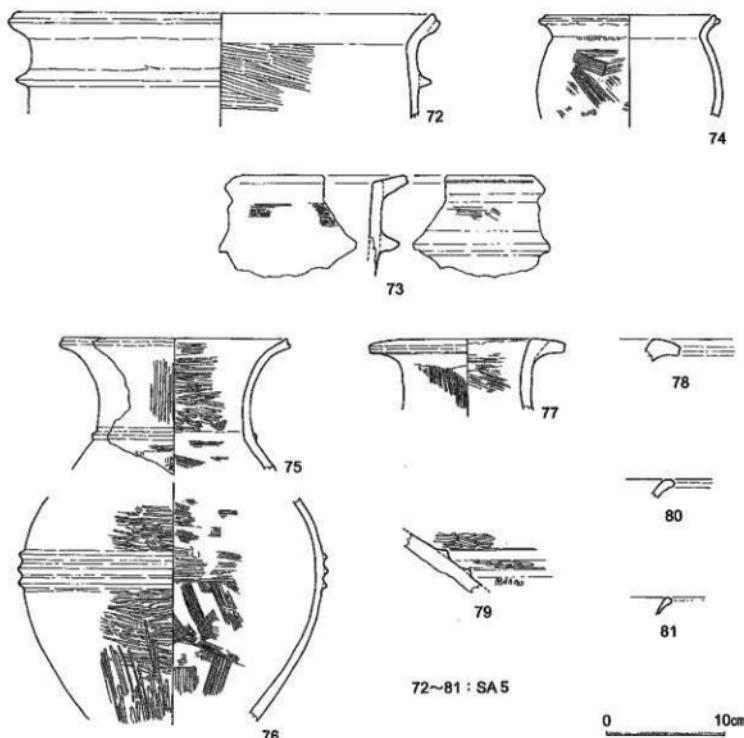


図14 5号住居跡出土土器実測図(2)

10号住居跡 (SA 10) 図21・22・36

北側と西側が調査区外へと続き、東側の大部分が現代の搅乱を受けているため、平面プラン・規模とともに不明である。土器は、中溝式壺(167)と無突帯系の壺(169)が床面上から出土したが、他は、遺構内覆土の上部から出土した。軽石を加工した石製品(299)も出土しており、内外面にそれぞれ十数ヶ所、竹管状工具が突っ込まれた痕跡がある。ほとんどの穴は未貫通であるが、周縁部にある3つは貫通しており、そこから削れています。その用途は不明である。

11号住居跡 (SA 11) 図22・23・35・36

東側が調査区外へと続き、全容は不明である。また、住居中心部を北西-南東方向に中世の溝状遺構(SD 4)が切っている。南北方向3.8mで東西方向3.5m以上の方形プランが想定される。床面はかたく締まり、貼床状となる。南西隅と住居中央部に比較的深いピットがある。土器は瀬戸内系の四線文壺(188)が床面上から出土した。外面にははっきりとしたハケメがみられ、胎土も明るい赤褐色を呈し、SA 9の163と同じく他の土器とは明確に区別できる。その他、壺177と二叉状口様の壺(185・186)も①層の下

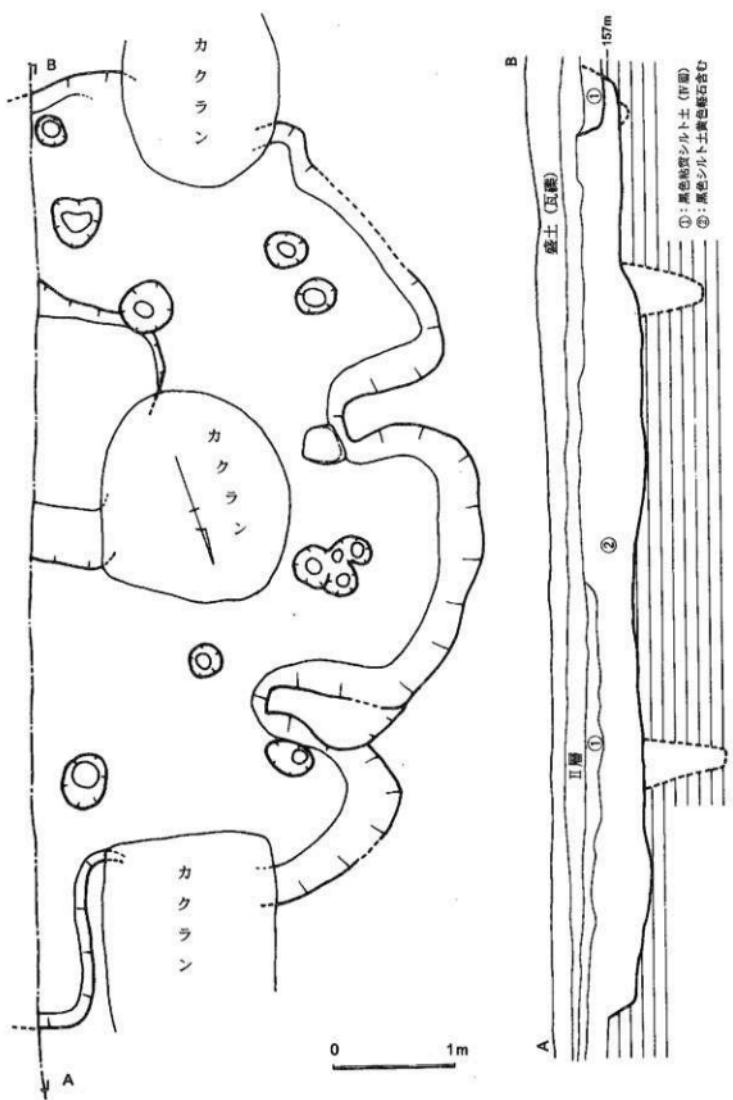


図15 6号住居跡実測図

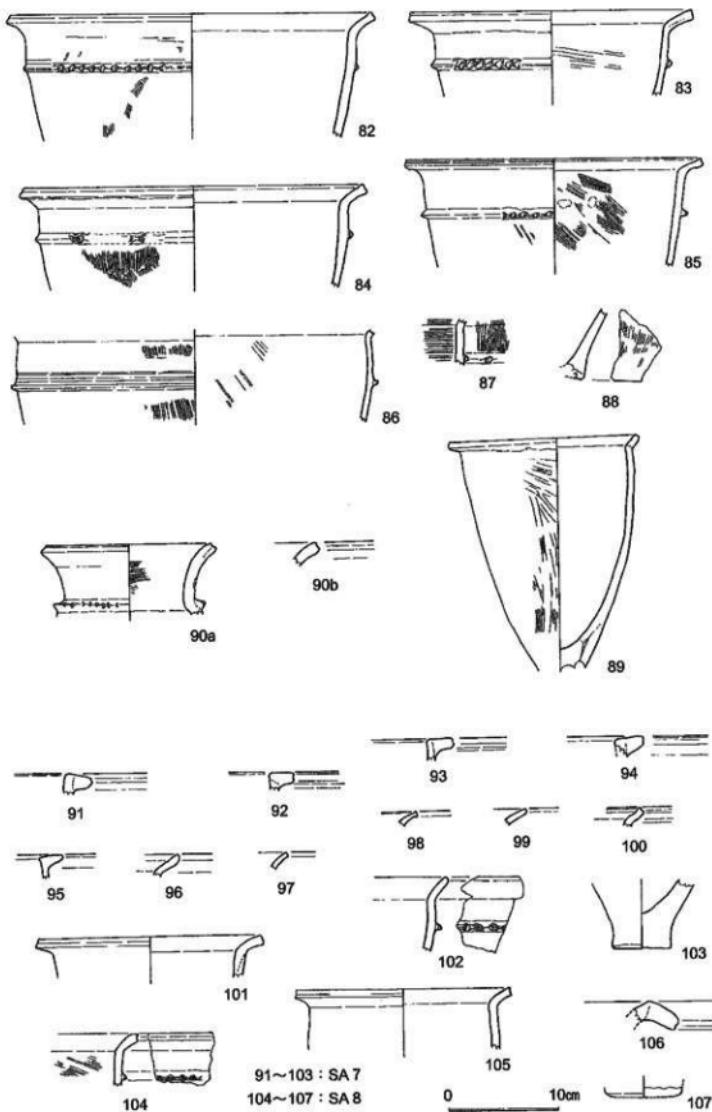
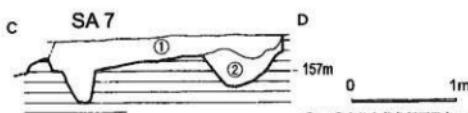
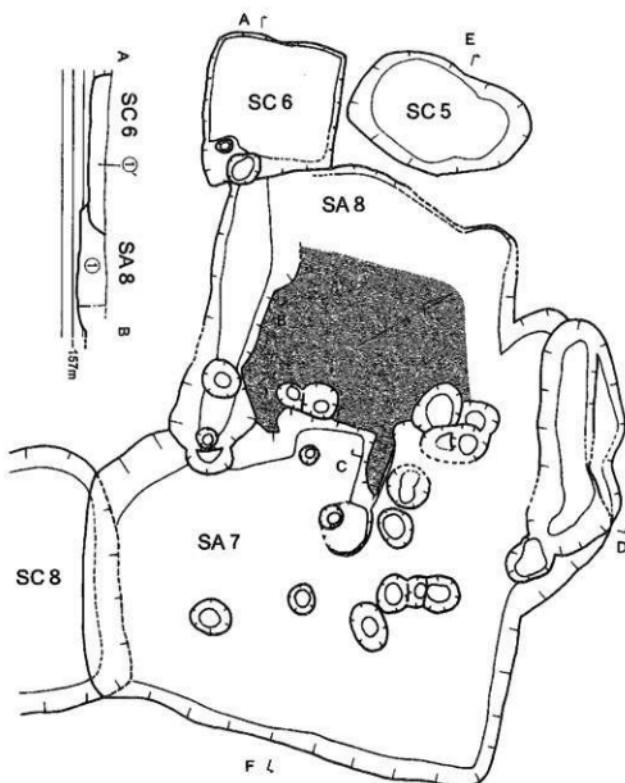
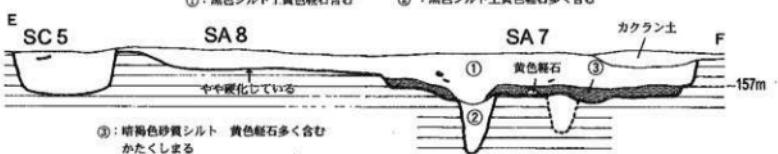


図16 6・7・8号住居跡出土土器実測図



①：よりも黄色軽石目立つ  
②：黒色シルト土黄色軽石多く含む



③：暗褐色紗質シルト 黄色軽石多く含む  
かたくしまる

① 黄色軽石  
② 黒色シルト土  
③ カクラン土

図17 7・8号住居跡および6号土坑実測図

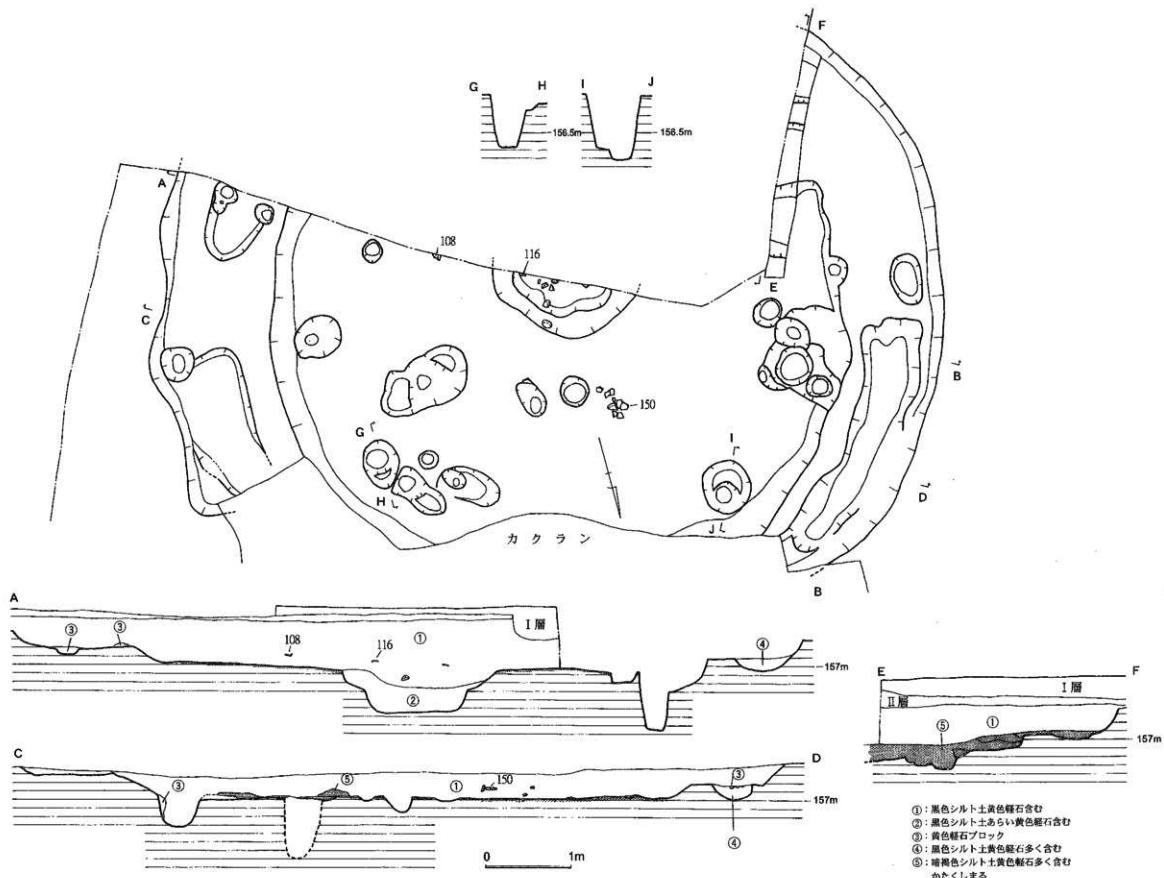


図18 9号住居跡実測図

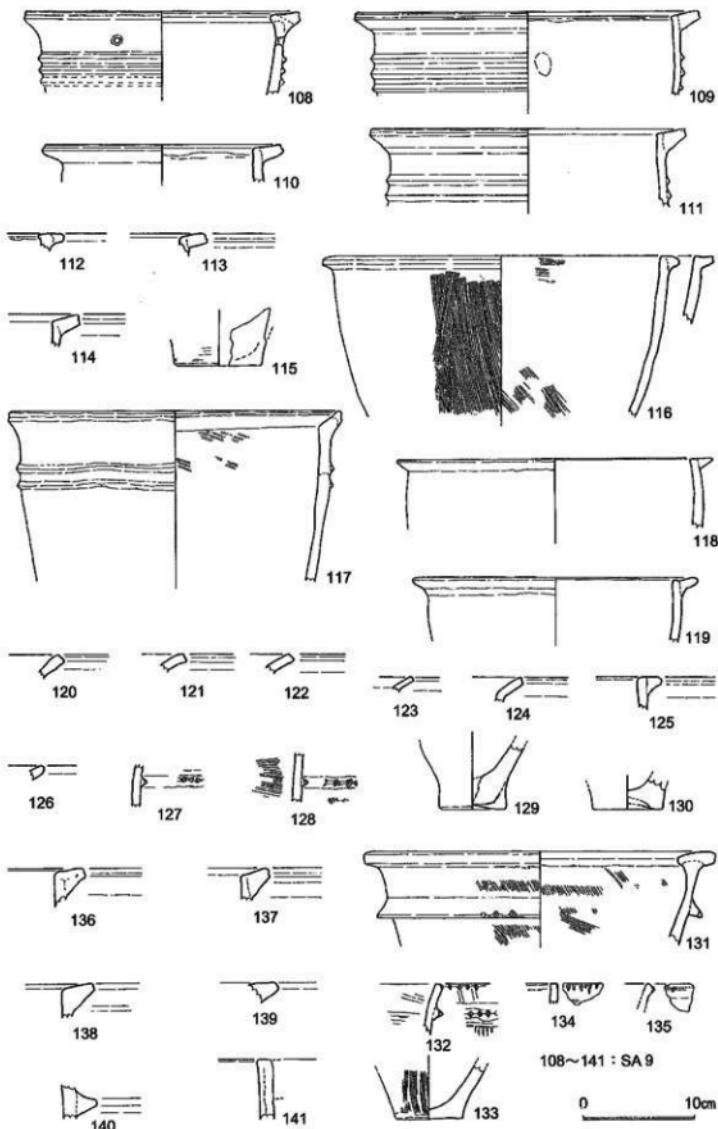


図19 9号住居跡出土土器実測図(1)

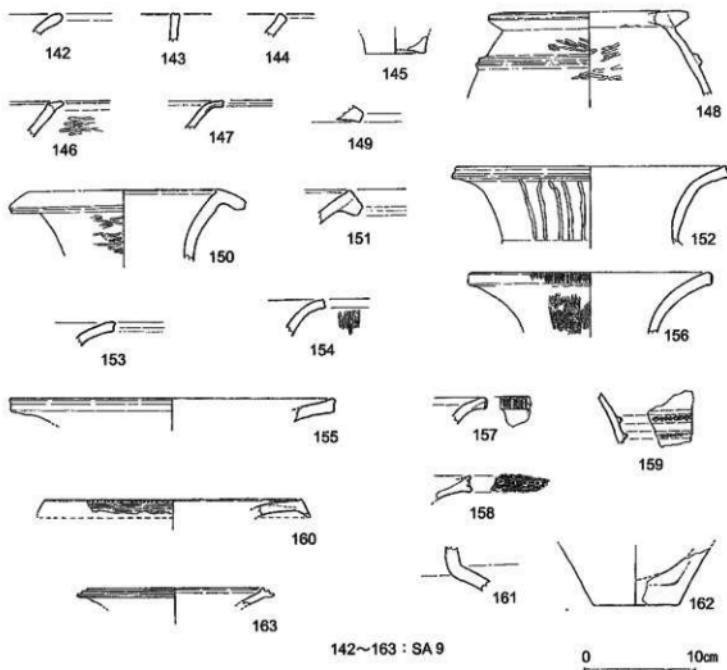


図20 9号住居跡出土土器実測図(2)

部から出土した。186は口唇部に部分的に浅い刻目がある。先端部を欠く磨製石斧(292)と砥石(285)が1点ずつ出土した。なお、住居の北東部が縄文時代(後期以降)の所産と思われる落し穴状土坑を切っている。その土坑内埋土は全体にかたく締まり、遺物はまったく出土していない。

#### 12号住居跡(SA 12) 図23・36

北側が調査区外へと続き、西側の大半が現代の搅乱を受け、全容は不明である。堅穴住居と認定することに躊躇したが、東側に突堤壁が1ヶ所確認され、「花弁状住居」の可能性が出てきたため、最終的に住居として扱った。SA 9に隣接しており、切り合い関係にあると思われるが、搅乱のため不明である。遺構内覆土は他の弥生時代の遺構と同様であるが、出土遺物は磨製石斧の未製品(293)が1点のみである。

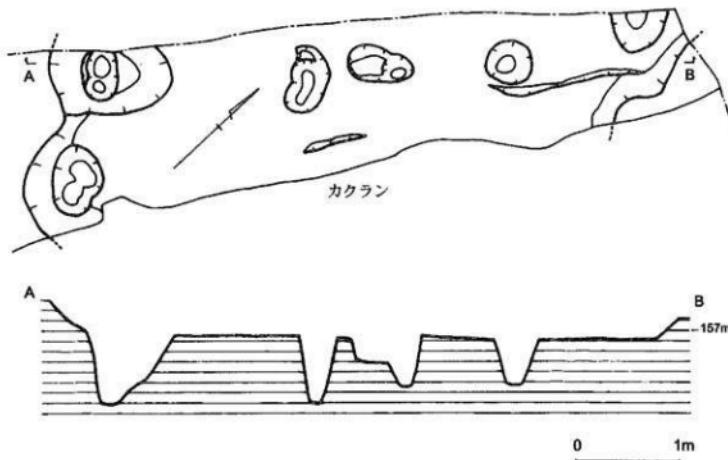


図21 10号住居跡実測図

#### [周溝状遺構]

##### 1号周溝状遺構 (S L 1) 図24・26

東西に長い楕円形プランである。周溝外周は長軸が8.1m・短軸が5.6mであり、溝幅は1.1m～0.7m、検出面からの深さ35cm～60cmである。溝の底面は東側が一段低くなり、さらに北側が一段低くなっている。また、周溝で囲まれた内側のほぼ中央に直径20cmのピットが1基ある他、北西部には溝に接続して浅い土坑が設けられている。これについては当初、溝との切り合にも考慮したが、土層断面を観察した結果、同時期と判断した。この土坑上部(②層)には土器小片と赤色化した小砾と白色(セキエイ?)の小砾(いずれも指先大)が多量にみつかった。このような小砾は溝全体に散在するが、土坑付近では特に目立ち、一帯に遺物が集まっているような感じである。また、反対側の南東部溝内にも土器や軽石が集中して出土した。土器は中溝式の甕(195)が溝内最上層の①層から出土した他は、ほとんど②層からの出土であり、逆L字口縁の甕(189)や下城式系の甕(199)などがみられる。

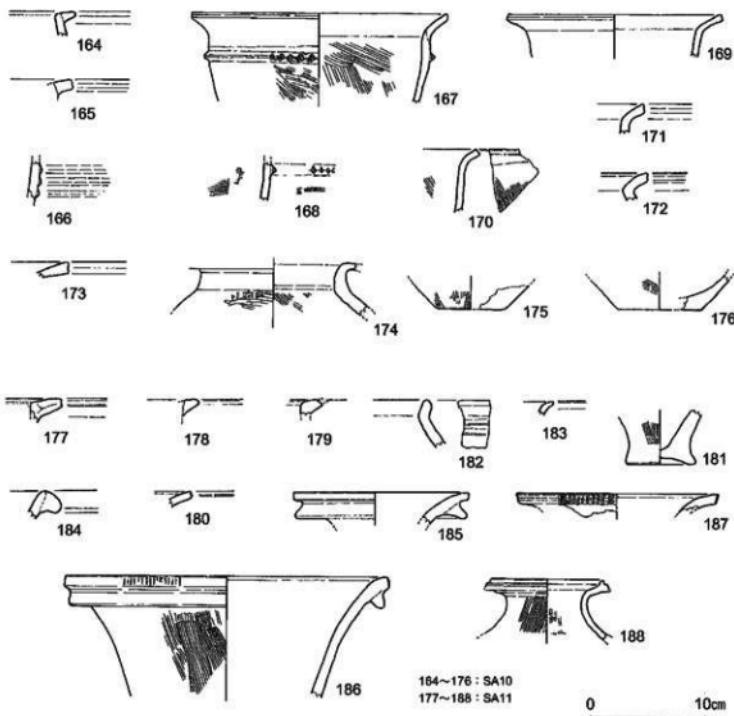


図22 10・11号住居跡出土土器実測図

#### 2号周溝状造構 (S L 2) 図25・26・35

西側の大部分を現代の建物基礎によって破壊されているが、南北に長い梢円形プランが想定できる。搅乱によって不明瞭であるが、南西部で確実に溝が切れていることから、全周しないものと思われる。周溝外周は長軸が10.7m、短軸が6mであり、溝幅は85cm~65cm、検出面からの深さ45cm~30cmである。溝の底面は北側が一段低くなっている。周溝で囲まれた内側には同時期の遺構を見い出すことができなかった。土器は、溝内の①層から出土した213を除くと他はすべて②層から出土した。中溝式の甕(208~213)や大甕(216~217)が主体を占め、逆L字口縁の甕(206・207)と下城式系の甕(214)の小片が少量みられる。石器は磨石(286)が1点出土した。

#### 3号周溝状造構 (S L 3) 図26・27

東側を現代の建物基礎によって破壊されているが、周溝外周が4.7m×4.7mの隅丸方形プランになるも

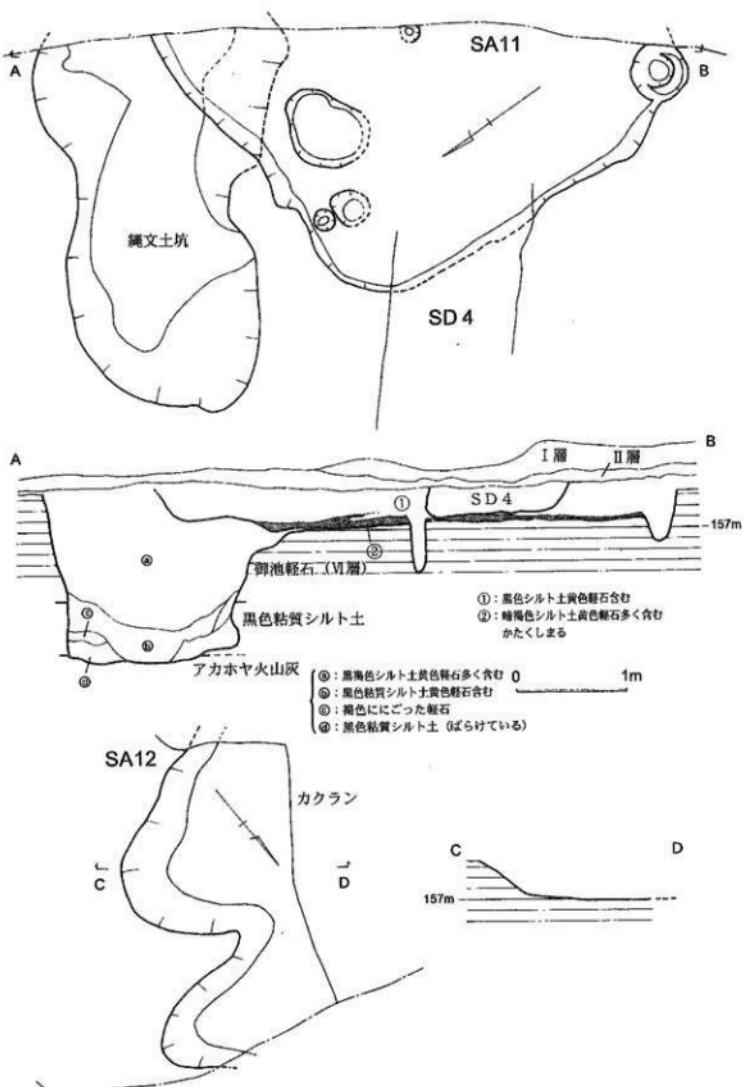


図23 11・12号住居跡測定図

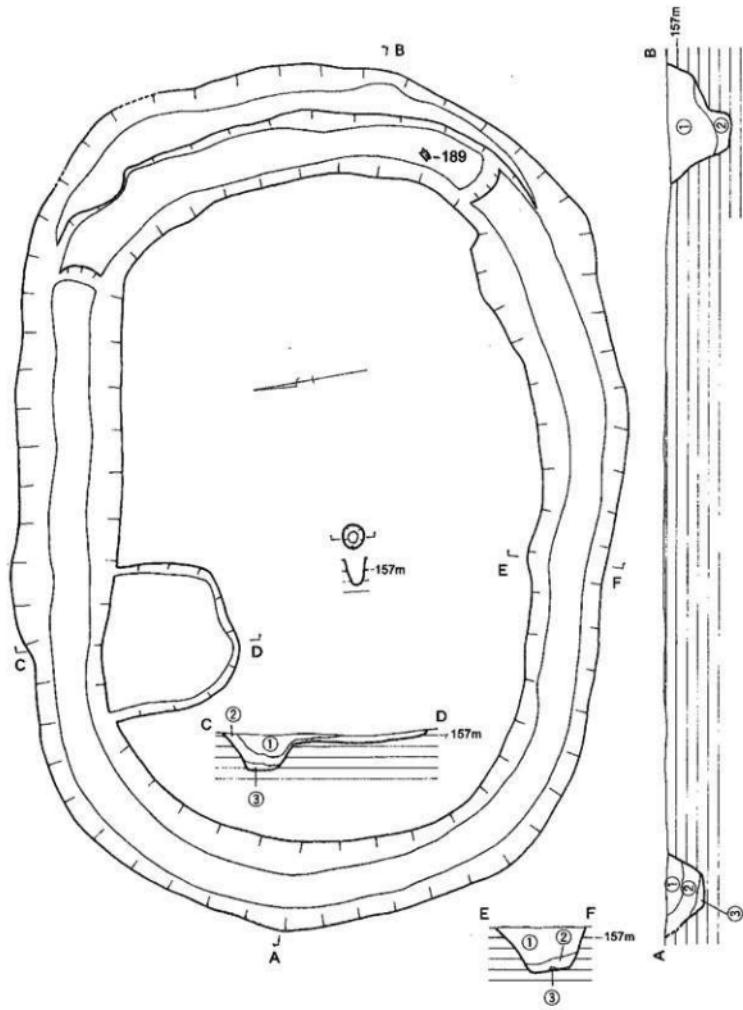


図24 1号周溝状遺構実測図

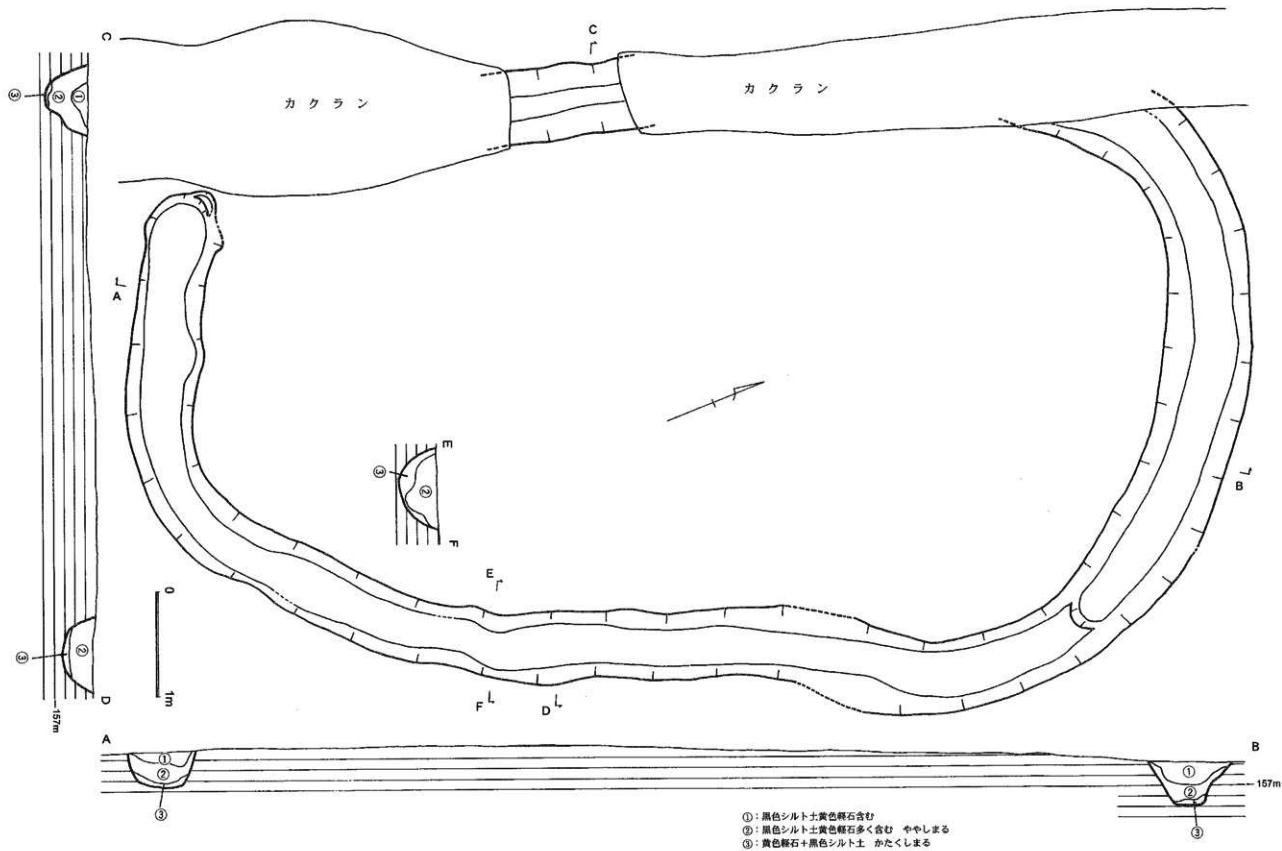


図25 2号周溝状造横断測図

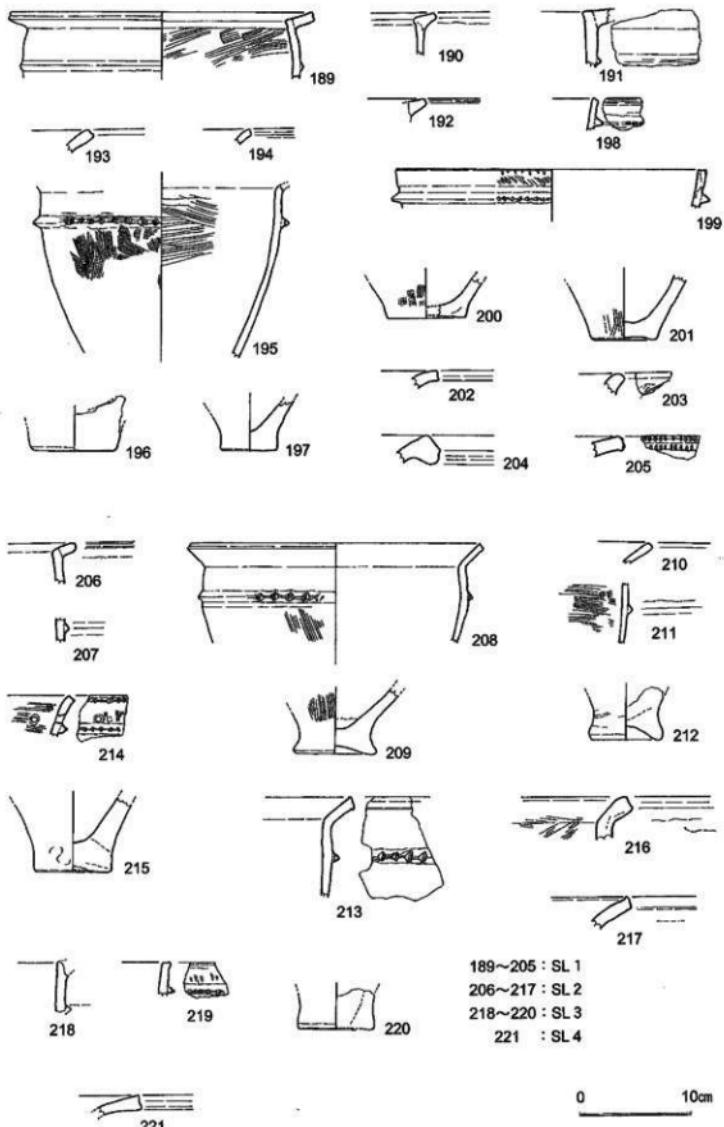


図26 1号周溝状遺構出土土器実測図

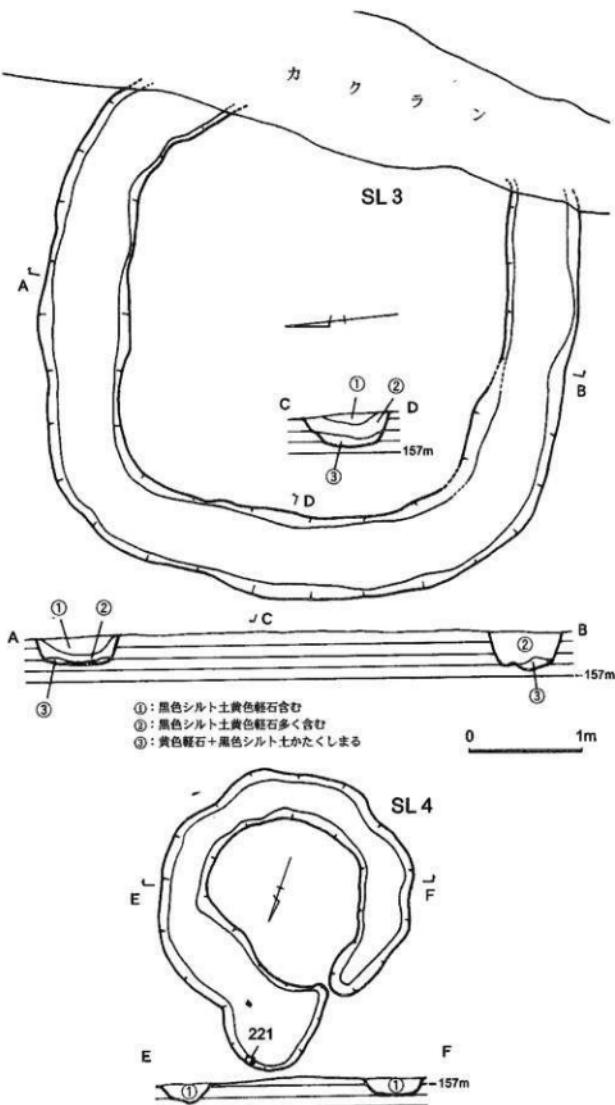


図27 3・4号周溝状遺構実測図

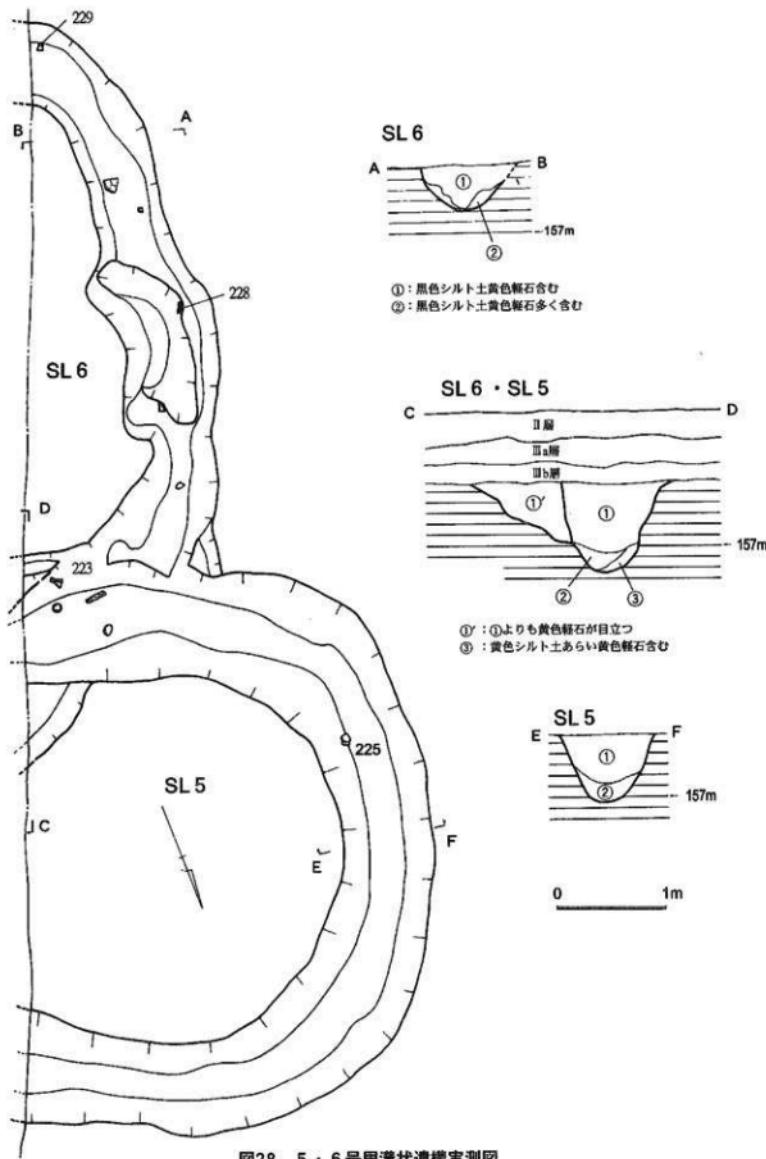


図28 5・6号周溝状造構実測図

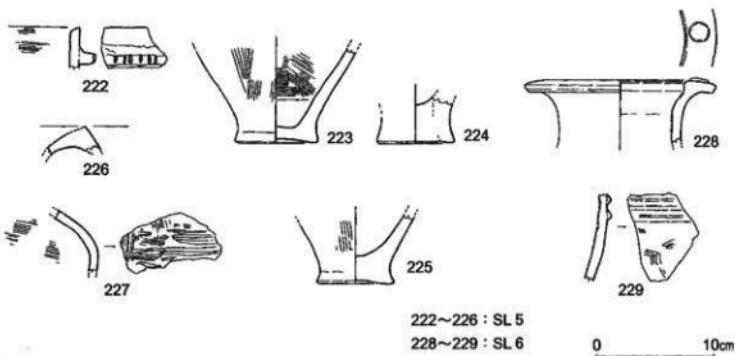


図29 5・6号周溝状遺構出土土器実測図

のと思われる。溝幅は75cm～65cm、検出面からの深さ35cm～25cmである。周溝で囲まれた内側には同時期の遺構を見い出すことができなかつた。土器は溝内の②層から逆L字口縁の甕(218)と下城式系の甕(219)の小片と甕の底部(220)が出土した。

#### 4号周溝状遺構(SL 4) 図26・27

周溝外周径が約2.3mのほぼ円形プランを基調とするが、北西部分が一部張り出したようになり、そこで溝が切れているため、全周せずにC字状となる。溝幅は65cm～45cm、検出面からの深さ15cmである。溝の上部から土器が2点出土したのみで、内1点の広口甕(221)が固化できた。

#### 5号周溝状遺構(SL 5) 図28・29

東側が調査区外へと続くため、全容は不明であるが、周溝外周径が約5.2mの隅丸方形ないし円形プランが想定できる。SL 6の北側で検出され、同周溝を切っている。溝幅は1.2m～0.8m、検出面からの深さ80cm～60cmである。周溝で囲まれた内側には同時期の遺構を見い出すことができなかつた。溝の南側半分を中心に入1層の上部から下部にかけて土器と炭化材が出土している。

#### 6号周溝状遺構(SL 6) 図28・29

SL 5と同じく東側が調査区外へと続くため、全容は不明であるが、円形プランというよりも、SL 1やSL 2のような長楕円状のプランが想定される。SL 5の南側で検出され、同周溝に切られている。溝幅は1m～0.6m、検出面からの深さ約40cmであるが、西側が部分的に幅広くなり、底面も一段低くなっている。溝内①層から垂れ下がり口縁の上面に円形浮文と脣部に三角突帯をもつ甕(228・229)が出土した。

#### [土坑]

##### 1号土坑(SC 1) 図30・32

東側が調査区外へと続くため、全容は不明であるが、直径が1m程度の円形プランの可能性が高い。断面形は底面向かってややすそ広がりとなるいわゆるフラスコ状を呈し、検出面からの深さ約60cmである。上層(①層)から、中溝式の甕(232)が、下層(②層)から甕の底部(233)が出土した。

##### 2号土坑(SC 2) 図30

菱形状の平面プランで、長辺約1.6m・短辺約1.4mである。深さは検出面から約10cmと浅いが、北西隅に深さ50cmのピットを伴っている。遺物はまったく出土していないが、遺構内の土層から弥生時代のものと判断した。

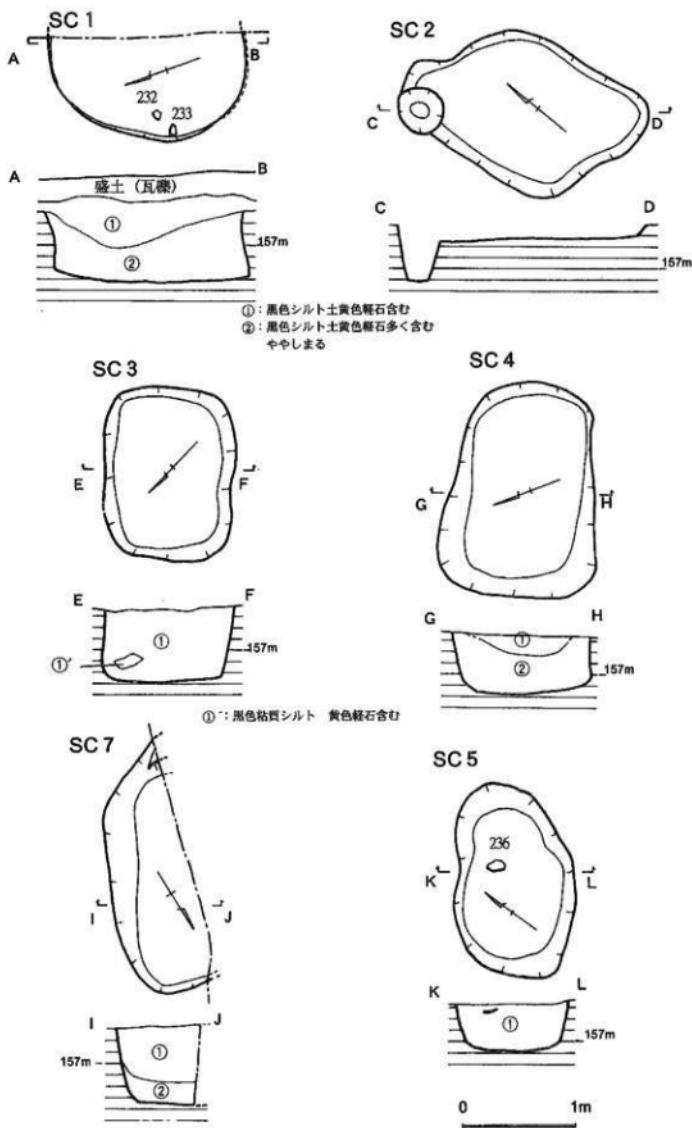


図30 1・2・3・4・5・7号土坑実測図

### 3号土坑 (SC 3) 図30・32

隅丸の長方形プランで、長軸1.5m・短軸1.15mである。断面形は北東側のみが底面に向かってすそ広がりとなる。検出面からの深さは約65cmである。内部から甕の口縁部片(234)が1点出土したのみである。

### 4号土坑 (SC 4) 図30・32

隅丸の台形状プランで、長軸1.9m・短軸1m~1.4mである。断面形は南側のみが底面に向かってすそ広がりとなる。検出面からの深さは約50cmである。遺物はまったく出土していない。

### 5号土坑 (SC 5) 図30・32

ややいびつな梢円形プランである。長軸1.7m・短軸1.1mである。断面形は逆台形状で、検出面からの深さは約40cmである。①層の上部から中溝式の甕(236)などが出土した。

### 6号土坑 (SC 6) 図17

SA 8の西隅を切っている。長方形プランで、長辺1.5m・短辺1.3mである。検出面からの深さは約15cmと比較的浅いが、南隅にはピットを2基伴っている。遺物は砥石が1点出土している(287)。

### 7号土坑 (SC 7) 図30

西側を現代の建物の基礎によって破壊されているが、隅丸長方形ないし梢円形プランが想定される。長軸2.2m・短軸0.8m以上である。断面形は逆台形状をなすものと思われ、検出面からの深さ約70cmである。南側の壁面には段がある。①層から胎土にキンウンモを含む甕(239・240)や下城式系の甕(241)が出土している。

### 8号土坑 (SC 8) 図31・32

いわゆる竪穴状遺構と呼ぶべきものと思われる。床面にピットが存在しないため、ここでは土坑に含めて取り扱った。隅丸の長方形プランで、規模は長軸2.5m・短軸2m、検出面からの深さ約50cmである。北側をSA 7に切られる。遺物はおおむね①層上部から出土した。土器・石器・櫛・炭化材などが投棄された状態で出土している。土器は中溝式の甕(244)があり、石器は磨製石鏃(288)がある。

#### (2)包含層出土遺物

##### 〔土器〕 図33

包含層(Ⅲ層)出土土器は、弥生時代中期後半のものを主体とするが、後期後半の手づくね土器も1点出土している(273)。なお、前節で紹介した遺構はすべて前者の時期に構築されており、後者の時期の遺構をとらえることはできなかった。

245~252は口縁部に突帯を貼り付けることによって、逆L字状の断面形態を作り出す甕で、胴部に三角突帯を1~3条もつものとそうでないもの(252)がある。図示したものはすべて胎土にキンウンモを含み、鹿児島県の大隅地方からの移入の可能性がある。今回の調査では遺構内出土土器(SA 9など)を含

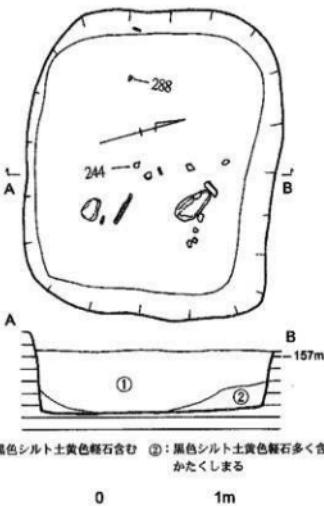


図31 8号土坑実測図

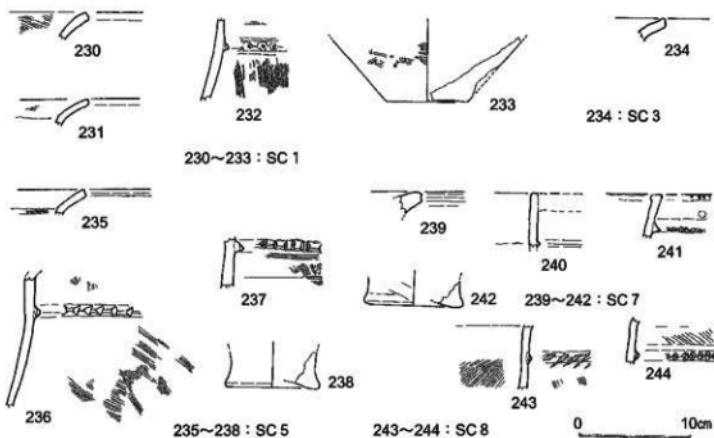


図32 1・3・5・7・8号土坑出土土器実測図

めても、キンウンモを含まないものが少なく、含むものの占める割合が非常に高いので、特殊な事情を考慮する必要があるのかもしれない。これらは口縁部に若干の形態差がみられるが、口縁があり立上がりない245~248がより古く、口縁部が先端に向かって先細りとなり、やや立ち上がる249~252がより新しいと思われる。既設定の様式名でいうと、前者と後者がそれぞれ南九州第IV様式と南九州第V様式（河口貞徳 1981）、もしくは山ノ口I式と山ノ口II式（中園 駿 1997）にあたる。胎土にキンウンモを含む大甕261~263は、上記の一群の甕に伴うものとみられる。

256はSL 1 出土の199と同一個体の可能性が高い。直口する口縁の外端部に刻目があり、口縁下に1条の刻目突帯をもつ甕である。いわゆる下城式系の甕に該当するが、器面調整にハケメが比較的顕著であることを除いては、胎土は後述する土器と変わることがない。包含層からはここに図示した以外に6点の出土がみられ、前筋の遺構内からも少量ずつ出土しており、あくまで客体的な存在の甕である。

253は口縁部が「く」の字に折れ、胴部上半に刻目突帯を1条めぐらせる甕で、いわゆる中溝式の甕と呼ばれている。前筋で述べたように、口縁部の形態差と突帯刻目にヴァリエーションがみられるが、SA 1・SA 6 出土土器が古く、SA 5 が新しいと考えられる。大甕264・265はこの一群の甕に伴うものとみられる。

254・255・257は口縁部が「く」の字に屈折する無突帯系の甕で、包含層から他に6点出土している。これらは破片のみでは中溝式の甕と区別するのが困難なものもある。遺構内からも少なからず出土しており、中溝式の甕に伴うようである。

壺には、266~271の各種があり、266・270・271の口唇部には鋸歯文が施されている。

#### 【石 器】 図36

294は頁岩製の磨製石鎌の未製品である。同じような石材はSA11とSA12から出土した磨製石鎌（292・293）にも用いられているのに対し、SA 7・SA 9・SC 8 の磨製石鎌（288・289~291・295~297）には綠色片岩系の石材が用いられている。298は頁岩製の比較的こぶりの石庖丁である。中央に穿孔があるが、すぐその横には未貫通の穿孔途中の痕跡が片面のみに認められる。背部には第1次調整痕である剥離痕が残っており、刃部は研ぎ減りによって、かすかに内側している。

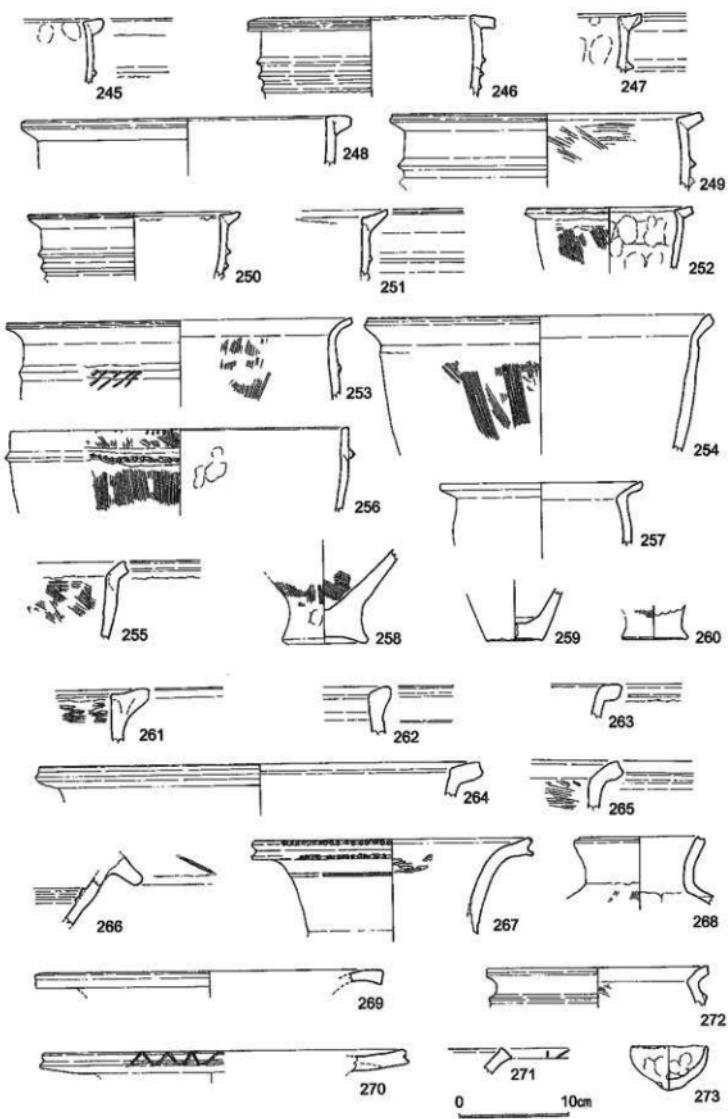


图33 包含层出土弥生土器实测图

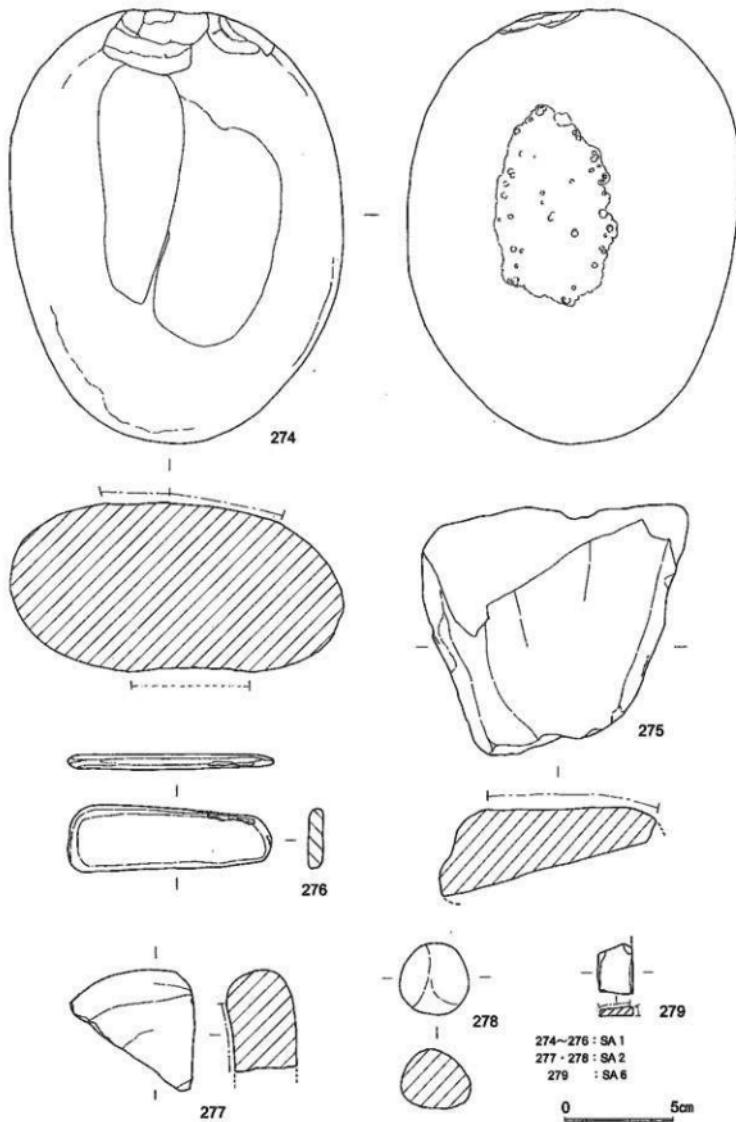


図34 弥生時代石器実測図 (1)

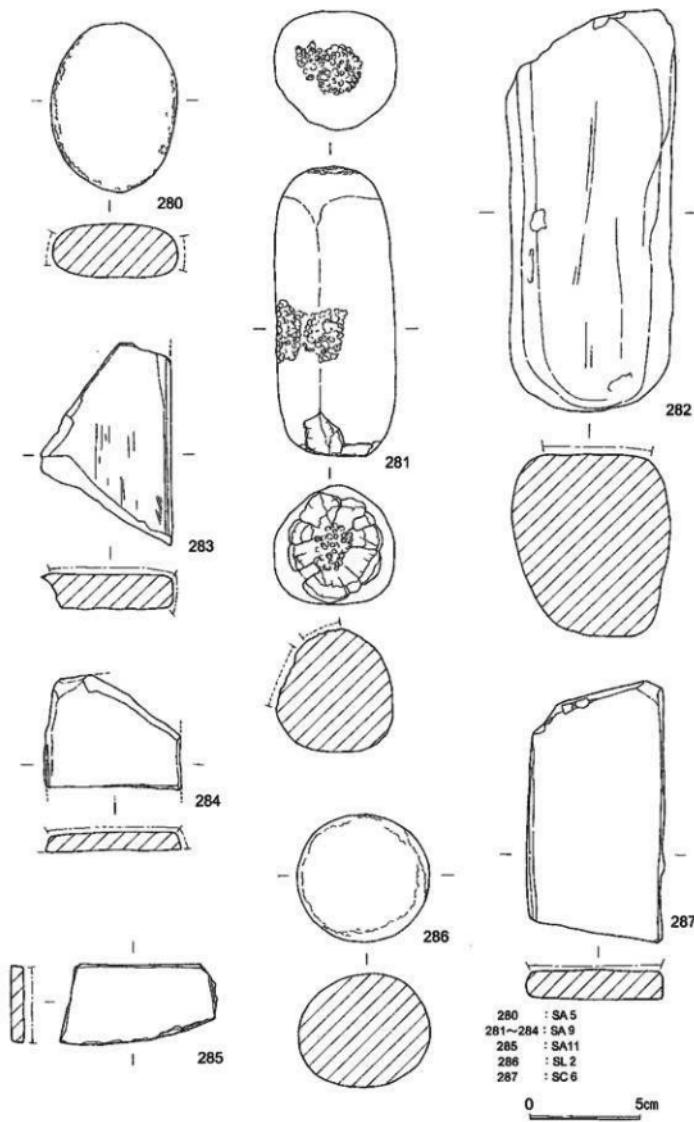


図35 弥生時代石器実測図 (2)

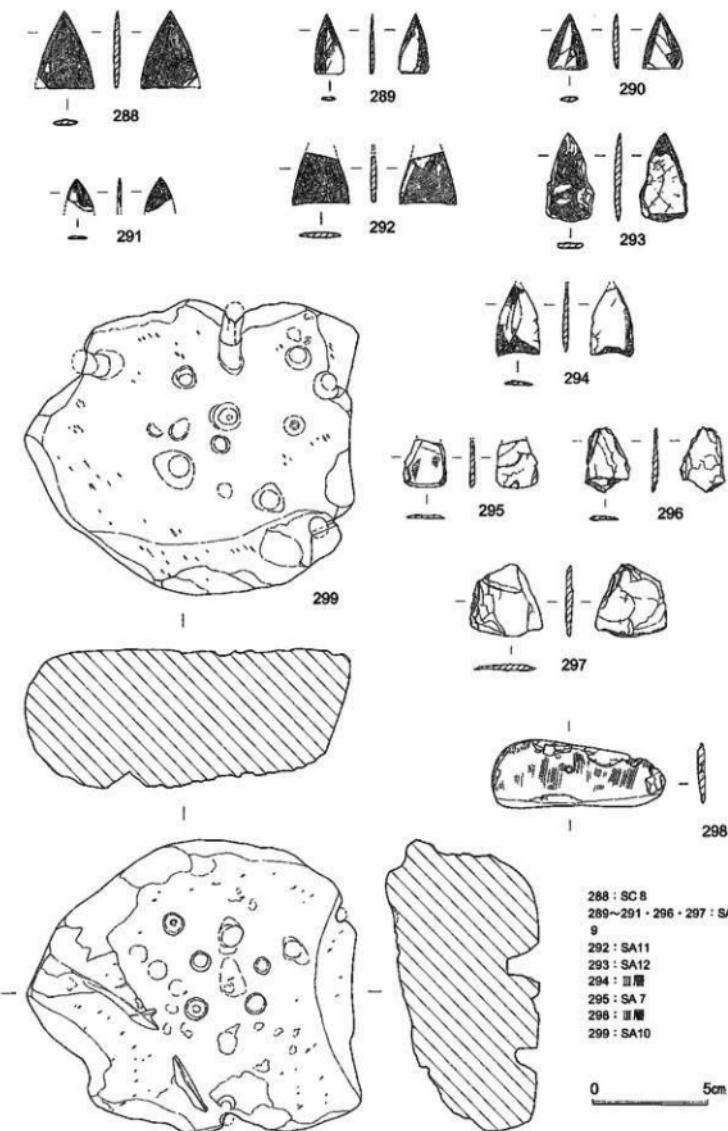


図36 弥生時代石器実測図 (3)

表1 弥生土器観察表

件番号	出土区	遺物・周	跡種	色 国		遺物七番号	取上番号
				外	内		
1 D-2 SAI	後	にがいぬスズ付	にがいぬ	ヨコナデ	ナデ	東・キンクンモ	
2 D-2 SAI	後	にがいぬスズ付	にがいぬ	ヨコナデ	ナデ	東・キンクンモ	34
3 D-2 SAI	後	にがいぬスズ付	鳥	ヨコナデ	ナデ	東・キンクンモ	350
4 D-2 SAI	後	にがいぬスズ付	にがいぬ	ヨコナデ	ナデ	東	114
5 D-2 SAI	後	灰削	スズ付	にがいぬ	ヨコナデ	東	1000
6 D-2 SAI	後	灰削	スズ付	にがいぬ	ヨコナデ	東	115
7 D-2 SAI	後	灰削	スズ付	にがいぬ	ヨコナデ	東	64
8 D-2 SAI	後	にがいぬ	スズ付	にがいぬ	ハタメ	東	79,1001,1041,1051,1338,1339,1341,1342
9 D-2 SAI	後	灰削	スズ付	灰削	ハタメ	東	1001,1002,1003,1051,1355,1344,1347~1353
10 D-2 SAI	後	灰削	スズ付	灰削	ハタメ	東	1046
11 D-2 SAI	後	灰削	スズ付	鳥	ナデ	東	57
12 D-2 SAI	後	灰削	スズ付	灰削	ナデ	東	31
13 D-2 SAI	後	灰削	スズ付	灰削	ハタメ	東	1051
14 D-2 SAI	後	灰削	スズ付	灰削	ハタメ・ミガキ	東	1340
15 D-2 SAI	後	灰削	スズ付	灰削	ナデ	東	1102,1104,1105,1106,1108,1307
16 D-2 SAI	後	灰削	スズ付	にがいぬ	ナデ	東・キンクンモ	108
17 D-2 SAI	後	灰削	スズ付	灰削	ナデ	東・キンクンモ	1080
18 D-2 SAI	後	灰削	スズ付	鳥	ナデ	東・キンクンモ	166
19 D-2 SAI	後	灰削	スズ付	鳥	ナデ・ミガキ	東・キンクンモ	372
20 D-2 SAI	後	灰削	スズ付	鳥	ナデ・ミガキ	東・キンクンモ	1849
21 D-2 SAI	後	灰削	スズ付	鳥	ナデ	東	1047
22 D-2 SAI	後	灰削	スズ付	鳥	ナデ	東	178
23 D-2 SAI	後	灰削	スズ付	にがいぬ	ハタメ	東	150,631,633
24 D-2 SAI	後	灰削	スズ付	灰削	ナデ・ミガキ	東	1305
25 D-2 SAI	後	灰削	スズ付	灰削	ナデ	東	105,106
26 D-2 SAI	後	灰削	スズ付	にがいぬ	ナデ	東	106~107
27 D-2 SAI	後	灰削	スズ付	にがいぬ	ハタメ	東	149
28 D-2 SAI	後	灰削	スズ付	にがいぬ	ナデ・ミガキ	東	1075
29 C-1 SAI	後	灰削	スズ付	にがいぬ	ナデ・ミガキ	東	1848
30 D-2 SAI	後	灰削	スズ付	ミガキ	ナデ	東	644,1067
31 D-2 SAI	後	灰削	スズ付	ミガキ	ナデ	東	1064,1071,1083,1305
32 D-2 SAI	後	灰削	スズ付	ミガキ	ナデ	東	1084
33 D-2 SAI	後	灰削	スズ付	ミガキ	ナデ	東・キンクンモ	1085
34 D-2 SAI	後	灰削	スズ付	鳥	ナデ	東・キンクンモ	1844
35 D-2 SAI	後	灰削	スズ付	鳥	ナデ	東・キンクンモ	1844
36 D-2 SAI	後	灰削	スズ付	にがいぬ	ナデ	東	1105
37 D-2 SAI	後	灰削	スズ付	灰削	ナデ	東	1295
38 D-2 SAI	後	灰削	スズ付	にがいぬ	ナデ	東	114
39 D-2 SAI	後	灰削	スズ付	にがいぬ	ナデ	東	508,509
40 D-2 SAI	後	灰削	スズ付	にがいぬ	ミガキ	東・キンクンモ	1155
41 D-3 SAI	大要	灰削	スズ付	ミガキ	ナデ	東・キンクンモ	1128
42 D-3 SAI	大要	灰削	スズ付	ミガキ	ナデ	東・キンクンモ	1128
43 D-3 SAI	大要	灰削	スズ付	ミガキ	ミガキ	東	507
44 D-3 SAI	大要	灰削	スズ付	ミガキ	ミガキ	東	1173
45 D-3 SAI	大要	灰削	スズ付	ミガキ	ナデ	東	1132
46 G-3 SAI	後	灰削	スズ付	ミガキ	ナデ	東	984
47 G-3 SAI	後	灰削	スズ付	ミガキ	ナデ	東	991
48 G-3 SAI	後	灰削	スズ付	にがいぬ	ハタメ(表面磨み有)	東	1194,1199,1200
49 G-3 SAI	後	灰削	スズ付	にがいぬ	ハタメ(表面磨み有)	東	1307,1309,1216,(238,1343,1366,1703,1715)
50 H-3 SAI	後	灰削	スズ付	灰削	ハタメ(表面磨み有)	東	1253
51 H-3 SAI	後	灰削	スズ付	灰削	ハタメ	東	1255
52 H-3 SAI	後	灰削	スズ付	灰削	ハタメ	東	1256
53 G-3 SAI	後	灰削	スズ付	灰削	ハタメ	東	1117,1179
54 G-4 SAI	後	灰削	スズ付	ハタメ	ナデ	東	1195
55 G-3 SAI	後	灰削	スズ付	ハタメ	ナデ	東	1193
56 G-3 SAI	後	灰削	スズ付	ハタメ	ナデ	東	1089
57 G-3 SAI	後	灰削	スズ付	ハタメ	ナデ	東	1232
58 H-3 SAI	後	灰削	スズ付	ハタメ	ナデ	東	1233
59 G-3 SAI	後	灰削	スズ付	にがいぬ	ナデ	東	1234
60 G-3 SAI	後	灰削	スズ付	にがいぬ	ナデ	東	1235
61 G-3 SAI	後	灰削	スズ付	にがいぬ	ナデ	東	1236
62 G-3 SAI	後	灰削	スズ付	にがいぬ	ナデ	東	1234
63 H-3 SAI	後	灰削	スズ付	にがいぬ	ナデ	東	1235
64 G-3 SAI	後	灰削	スズ付	にがいぬ	ナデ	東	1236
65 G-3 SAI	後	灰削	スズ付	にがいぬ	ナデ	東	1237
66 C-6 SAI	後	灰削	スズ付	にがいぬ	ナデ	東	1220
67 G-3 SAI	後	灰削	スズ付	にがいぬ	ナデ	東	1221
68 H-3 SAI	後	灰削	スズ付	明鏡	ハタメ	東	1221
69 H-3 SAI	後	灰削	スズ付	にがいぬ	ナデ	東	1239
70 G-3 SAI	後	灰削	スズ付	にがいぬ	ナデ	東	1239
71 H-3 SAI	後	灰削	スズ付	にがいぬ	ナデ	東・キンクンモ	1237
72 H-3 SAI	後	灰削	スズ付	にがいぬ	ナデ	東	1233
73 H-3 SAI	後	灰削	スズ付	鳥	ナデ・ハタメ	東	1220
74 H-3 SAI	後	灰削	スズ付	鳥	ナデ	東	1220,1254
75 H-3 SAI	後	灰削	スズ付	鳥	ナデ	東	1221,1225
76 G-3 SAI	後	灰削	スズ付	灰	ハタメのちミガキ	東	1221,1240,1245,1400,1780
77 G-3 SAI	後	灰削	スズ付	灰	ハタメ	東	1203
78 G-3 SAI	後	灰削	スズ付	灰	ナデ	東	1203
79 G-3 SAI	後	灰削	スズ付	灰	ミガキ	東	1197
80 H-3 SAI	後	小形骨?	灰削	にがいぬ	ナデ	東・キンクンモ	
81 G-3 SAI	後	小形骨?	灰削	にがいぬ	ナデ	東	1465
82 D-4 SAI	後	灰削	スズ付	明鏡	ナデ	東	1438,1440
83 D-4 SAI	後	灰削	スズ付	明鏡	ナデ	東	1466,1475
84 D-4 SAI	後	灰削	スズ付	にがいぬ	ハタメ	東	1458
85 D-4 SAI	後	灰削	スズ付	にがいぬ	ナデ	東	1457
86 D-4 SAI	後	灰削	スズ付	にがいぬ	ハタメ	東	1747
87 D-4 SAI	後	灰削	スズ付	明鏡	ハタメ	東	1747
88 D-4 SAI	後	灰削	スズ付	にがいぬ	ナデ	東	1747
89 D-4 SAI	後	灰削	スズ付	にがいぬ	ナデ	東	1481,1482,1492,1493
90a D-4 SAI	後	灰削	スズ付	にがいぬ	ナデ	東	1450
90b D-4 SAI	後	灰削	スズ付	にがいぬ	ナデ	東	1457
91 C-6 SAT	後	灰削	スズ付	灰削	ミガキ	東	1397
92 C-6 SAT	後	灰削	スズ付	ナデ	ナデ	東・キンクンモ	

表2 弥生土器観察表

図版番号	川土器	造機・形	部	外		内		胎土色	取上番号	
				外	内	外	内			
93	C-6	SAT	變	灰面陶 史ス村	にない焼	ナデ	ナデ	灰・キンコンモ	—	
94	C-6	SAT	變	灰面陶 史ス村	にない焼	ナデ	ナデ	灰・キンコンモ	—	
95	C-6	SAT	變	灰面陶 史ス村	にない焼	ナデ	ナデ	灰	—	
96	C-6	SAT	變	灰面陶 史ス村	にない焼	ナデ	ナデ	灰	—	
97	C-6	SAT	變	灰面陶 史ス村	にない焼	ナデ	ナデ	灰	—	
98	C-6	SAT	變	灰面陶 史ス村	にない焼	ナデ	ナデ	灰	—	
99	C-6	SAT	變	穀 史ス村	無	ナデ	ナデ	灰	—	
100	C-6	SAT	變	灰面陶	灰面陶	ナデ	ナデ	灰	—	
101	C-6	SAT	變	灰面陶 史ス村	灰面陶	ナデ	ナデ	灰	1391	
102	C-6	SAT	變	灰面陶	灰面陶	ナデ	ナデ	灰	1392	
103	C-6	SAT	變	灰面陶 史ス村	灰面陶 製作付	ナデ	ナデ	灰	1393	
104	C-6	SAT	變	灰面陶 史ス村	にない焼	ナデ	ナデ	灰	—	
105	C-6	SAT	變	灰面陶 史ス村	にない焼	ナデ (表面剥み有)	ナデ	灰・キンコンモ	—	
106	C-6	SAT	變	灰面陶	無	ナデ	ナデ	灰	—	
107	C-6	SAT	不明	にない焼	無	ナデ	ナデ	灰	—	
108	G-5	SAT	變	穀 史ス村	無	ナデ	ナデ	灰・キンコンモ	1583	
109	G-5	SAT	變	穀 史ス村	無	ナデ	ナデ	灰・キンコンモ	1544	
110	G-5	SAT	變	灰面陶 史ス村	史	ナデ	ナデ	灰・キンコンモ	1578	
111	G-5	SAT	變	穀 史ス村	無	ナデ	ナデ	灰・キンコンモ	1543, 1545	
112	G-5	SAT	變	穀	にない焼	ナデ	ナデ	灰・キンコンモ	—	
113	G-5	SAT	變	穀	無	ナデ	ナデ	灰・キンコンモ	—	
114	G-5	SAT	變	穀	にない焼	ナデ	ナデ	灰・キンコンモ	1577	
115	G-5	SAT	變	穀	にない焼	ナデ	ナデ	灰・キンコンモ	1562 (1365と重合)	
116	G-5	SAT	變	南背 史ス村	無	ハケメ	ナデ	灰・キンコンモ	1540, 1547, 1561, 1595, 1894	
117	G-5	SAT	變	にない焼 史ス村	無	工具ナデ	ナデ	灰・キンコンモ	1536, 1537, 1541, 1543, 1594	
118	G-5	SAT	變	にない焼 史ス村	にない焼	ナデ	ナデ	灰	—	
119	G-5	SAT	變	穀 史ス村	無	ナデ	ナデ	灰・キンコンモ	1571	
120	G-5	SAT	變	穀 史ス村	無	ナデ	ナデ	灰	—	
121	G-5	SAT	變	穀 史ス村	無	ナデ	ナデ	灰	—	
122	G-5	SAT	變	穀	にない焼	ナデ	ナデ	灰	—	
123	G-5	SAT	變	穀 史ス村	にない焼	ナデ	ナデ	灰	—	
124	G-5	SAT	變	穀	にない焼	ナデ	ナデ	灰	1561	
125	I-5	SAT	變	にない焼 史ス村	にない焼	ナデ	ナデ	灰	1506	
126	G-5	SAT	變	にない焼	にない焼	ナデ	ナデ	灰	—	
127	G-5	SAT	變	穀	にない焼	ナデ	ナデ	灰	1499	
128	G-5	SAT	變	穀 史ス村	にない焼	ナデ	ナデ	灰	—	
129	G-5	SAT	變	灰面陶	にない焼	ナデ	ナデ	灰	1552	
130	G-5	SAT	變	灰面陶	無	ナデ	ナデ	灰	—	
131	G-5	SAT	變	にない焼 史ス村	灰面陶	ハケメ	ナデ (表面のちナデ)	灰	1488	
132	G-5	SAT	變	にない焼	にない焼	ハケメ	ナデ	灰	—	
133	G-5	SAT	變	にない焼 史ス村	にない焼	ナデ	ナデ	灰	1538	
134	G-5	SAT	變	にない焼	にない焼	ナデ	ナデ	灰	—	
135	G-5	SAT	變	西周	無	ナデ	ナデ	灰	—	
136	G-5	SAT	變	穀 史ス村	無 製作付	ナデ	ナデ	灰・キンコンモ	1601	
137	G-5	SAT	變	にない焼	にない焼	ナデ	ナデ	灰・キンコンモ	—	
138	G-5	SAT	變	にない焼	無	ナデ	ナデ	灰・キンコンモ	—	
139	G-5	SAT	大變?	灰面陶	にない焼	ナデ	ナデ	灰	—	
140	G-5	SAT	變?	にない焼	にない焼	ナデ	ナデ	灰・キンコンモ	1596	
141	G-5	SAT	變?	にない焼	にない焼	ナデ	ナデ	灰	—	
142	G-5	SAT	變?	西周	にない焼	ナデ	ナデ	灰	1505	
143	G-5	SAT	變?	にない焼	にない焼	ナデ	ナデ	灰	—	
144	G-5	SAT	變?	にない焼	にない焼	ナデ	ナデ	灰	—	
145	G-5	SAT	變?	明陶	無	ナデ	ナデ	灰	—	
146	G-5	SAT	變?	明陶	無	ナデ	ナデ	灰・キンコンモ	1618	
147	G-5	SAT	變?	明陶	無	ナデ	ナデ	灰	—	
148	G-5	SAT	變?	にない焼	にない焼	ミガキ	ナデ	灰・キンコンモ	1588	
149	G-5	SAT	變?	穀	無	ナデ	ナデ	灰	1889	
150	G-5	SAT	變?	穀	にない焼	ミガキ	ナデ	灰	1515, 1551, 1560, 1571, 1802	
151	G-5	SAT	變?	穀	にない焼	ミガキ	ナデ	灰・キンコンモ	—	
152	G-5	SAT	變?	穀	にない焼	ミガキ	ナデ (表面のちナデ) 明陶瓦玉付	灰・キンコンモ	1521, 1523	
153	G-5	SAT	變?	穀	にない焼	ナデ	ナデ	灰・キンコンモ	—	
154	G-5	SAT	變?	にない焼	にない焼	ナデ	ナデ	灰・キンコンモ	—	
155	G-5	SAT	變?	にない焼	無	ナデ	ナデ	灰	—	
156	G-5	SAT	變?	にない焼	にない焼	ナデ	ナデ	灰	1573	
157	G-5	SAT	變?	灰面陶	無	ナデ	ナデ	灰	—	
158	G-5	SAT	變?	灰面陶	無	ナデ	ナデ	灰	1585	
159	G-5	SAT	變?	灰面陶	無	ナデ	ナデ	灰	—	
160	G-5	SAT	變?	灰面陶	無	ナデ	ナデ	灰	—	
161	G-5	SAT	變?	灰面陶	無	ナデ	ナデ	灰	—	
162	G-5	SAT	變?	にない焼	無	ナデ	ナデ	灰	1552	
163	G-5	SAT	變?	無	無	ナデ	ナデ	灰	1487	
164	F-5	SAT	變?	穀 史ス村	灰面陶	ナデ	ナデ	灰	1488	
165	F-5	SAT	變?	にない焼	無	ナデ	ナデ	灰	1638	
166	F-5	SAT	變?	灰面陶	にない焼	ナデ	ナデ	灰・キンコンモ	—	
167	F-5	SAT	變?	にない焼 史ス村	にない焼	ハケメ (表面剥み有)	ナデ	灰・キンコンモ	1628	
168	F-5	SAT	SA10	變?	にない焼	ハケメ (表面のちナデ)	ナデ	灰	—	
169	F-5	SAT	SA10	變?	穀 史ス村	無	ナデ	ナデ	1631	
170	F-5	SAT	SA10	變?	穀 史ス村 史ス村	灰面陶	ナデ	ナデ	1557	
171	F-5	SAT	SA10	變?	にない焼 史ス村	にない焼	ナデ	ナデ	1624	
172	F-5	SAT	SA10	變?	にない焼 史ス村	灰面陶	ナデ	ナデ	1629	
173	F-5	SAT	SA10	變?	にない焼	ミガキ	ナデ	灰・キンコンモ	—	
174	F-5	SAT	SA10	變?	にない焼	ミガキ	ナデ	灰	—	
175	F-5	SAT	SA10	變?	無	ナデ	ナデ	灰	1557	
176	F-5	SAT	SA10	變?	灰面陶	ハケメ	ナデ	ナデ	—	
177	F-5	SAT	SA11	變?	穀 史ス村	にない焼	ナデ	ナデ	灰・キンコンモ	1883
178	F-5	SAT	SA11	變?	にない焼	ナデ	ナデ	灰・キンコンモ	—	
179	F-5	SAT	SA11	變?	にない焼	ナデ	ナデ	灰	1656	
180	F-5	SAT	SA11	變?	灰面陶	ナデ	ナデ	灰	—	
181	G-6	SAT11	變?	穀	にない焼	ハケメ	ナデ	灰	1907	
182	F-6	SAT11	變?	穀	にない焼	ナデ	ナデ	灰	1656	
183	F-6	SAT11	變?	灰面陶	無	ナデ	ナデ	灰	—	
184	F-6	SAT11	變?	明陶	無	ナデ	ナデ	灰・キンコンモ	—	

表3 弥生土器観察表

番号	出土区	遺物・周	部	色		形		出土砂粒	取上番号
				内	外	内	外		
185	F-6	SAL1	器	にかい縁	ナデ	ナデ	ナ	葉	1648
186	F-6	SAL1	器	にかい縁	ナデ	ナデ	ハケヌのちナデ	葉・キンランモ	1645
187	F-6	SAL1	器	縁	ナデ	ナデ	ナ	葉	1664
188	D-3	SAL1	器	縁	ナデ	ナデ	ナ	葉・シラヒナモ	159, 523, 659, 1906
189	D-3	SAL1	器	にかい縁	ナデ	ナデ	ナ	葉・キンランモ	1797
190	D-3	SAL1	器	にかい縁	ナデ	ナデ	ナ	葉・キンランモ	1797
191	D-3	SAL1	器	縁	ナデ	ナデ	ナ	葉・キンランモ	1271, 1272
192	D-4	SAL1	器	縁	ナデ	ナデ	ナ	葉・キンランモ	1257
193	D-3	SAL1	器	にかい縁	ナデ	ナデ	ナ	葉	1257
194	D-3	SAL1	器	縁	ナデ	ナデ	ナ	葉	1257
195	D-3-4	SAL1	器	にかい縁	ナデ	ナデ	ナ	葉	400, 403, 471, 491, 1257
196	D-3	SAL1	器	にかい縁	ナデ	ナデ	ナ	葉・キンランモ	1265, 311503と結合
197	D-4	SAL1	器	縁	ナデ	ナデ	ナ	葉	1263
198	D-3	SAL1	器	にかい縁	ナデ	ナデ	ナ	葉	1275
199	D-3	SAL1	器	にかい縁	ナ	ハケヌ	ナ	葉	536, 1280
200	D-3	SAL1	器	縁	ナ	ハケヌ	ナ	葉	1277
201	D-3	SAL1	器	縁	ナ	ハケヌ	ナ	葉	1277
202	D-3	SAL1	器	にかい縁	ナ	ハケヌ(成形文)	ナ	葉	1277
203	D-3	SAL1	器	縁	ナ	ハケヌ	ナ	葉	1277
204	D-3	SAL1	器	縁	ナ	ハケヌ	ナ	葉・キンランモ	1277
205	D-3	SAL1	器	縁	ナ	ハケヌ	ナ	葉	1277
206	D-3	SAL1	器	にかい縁	ナ	ハケヌ	ナ	葉・キンランモ	1314
207	D-4	SAL1	器	にかい縁	ナ	ハケヌ	ナ	葉・キンランモ	1314
208	C-5	SAL1	器	にかい縁	ナ	ハケヌ(灰吹跡み表面)	ナ	葉	1333
209	C-5	SAL1	器	縁	ナ	ハケヌ	ナ	葉	1334
210	D-4	SAL1	器	にかい縁	ナ	ハケヌ(灰吹跡み表面)	ナ	葉	1334
211	D-5	SAL1	器	にかい縁	ナ	ハケヌ(成形文)	ナ	葉	1316
212	C-5	SAL1	器	縁	ナ	ハケヌ	ナ	葉	1910
213	D-5	SAL1	器	にかい縁	ナ	ハケヌ	ナ	葉	1350
214	D-5	SAL1	器	にかい縁	ナ	ハケヌ(成形文)	ナ	葉	1350
215	D-5	SAL1	器	にかい縁	ナ	ハケヌ(成形文)	ナ	葉	1350
216	D-5	SAL1	大腹	にかい縁	ナ	ハケヌ	ナ	葉	1320
217	C-5	SAL1	大腹?	にかい縁	ナ	ハケヌ	ナ	葉	1320
218	C-5	SAL1	器	縁	ナ	ハケヌ	ナ	葉・キンランモ	1320
219	C-5	SAL1	器	縁	ナ	ハケヌ(成形文)	ナ	葉	1373
220	C-5	SAL1	器	縁	ナ	ハケヌ(成形文)	ナ	葉	1368, 1370
221	C-3	SAL1	器	にかい縁	ナ	ハケヌ	ナ	葉	1856
222	E-12	SAL1	器	縁	ナ	ハケヌ	ナ	葉	1781
223	E-12	SAL1	器	にかい縁	ナ	ハケヌ	ナ	葉	1753, 1768
224	E-12	SAL1	器	にかい縁	ナ	ハケヌ	ナ	葉	1757
225	E-12	SAL1	器	縁	ナ	ハケヌ	ナ	葉	1757
226	E-12	SAL1	器	にかい縁	ナ	ハケヌ	ナ	葉	1758
227	E-12	SAL1	器	縁	ナ	ハケヌ(成形文)	ナ	葉・キンランモ	1758
228	E-12	SAL1	器	縁	ナ	ハケヌ(成形文)	ナ	葉・キンランモ	1758
229	E-13	SAL1	器	縁	ナ	ハケヌ	ナ	葉	1793
230	D-5	SAL1	器	にかい縁	ナ	ハケヌ	ナ	葉	1789
231	D-5	SAL1	器	にかい縁	ナ	ハケヌ	ナ	葉	1789
232	D-2	SAL1	器	縁	ナ	ハケヌ(成形文)	ナ	葉	1873
233	D-2	SAL1	器	にかい縁	ナ	ハケヌ(成形文)	ナ	葉	1874
234	C-5	SAL1	器	縁	ナ	ハケヌ	ナ	葉	1874
235	C-6	SAL1	器	にかい縁	ナ	ハケヌ	ナ	葉	1414
236	C-6	SAL1	器	縁	ナ	ハケヌ	ナ	葉	1411
237	C-6	SAL1	器?	にかい縁	ナ	ハケヌ	ナ	葉	1418
238	C-6	SAL1	器	縁	ナ	ハケヌ	ナ	葉	1421
239	C-6	SAL1	器	にかい縁	ナ	ハケヌ	ナ	葉・キンランモ	1421
240	C-6	SAL1	器	にかい縁	ナ	ハケヌ	ナ	葉	1421
241	C-6	SAL1	器	にかい縁	ナ	ハケヌ	ナ	葉	1421
242	C-6	SAL1	器	縁	ナ	ハケヌ	ナ	葉	1427
243	C-6	SAL1	器	縁	ナ	ハケヌ	ナ	葉	1832
244	C-6	SAL1	器	にかい縁	ナ	ハケヌ	ナ	葉	1832
245	E-3	SAL1	器	にかい縁	ナ	ハケヌ	ナ	葉	1872
246	D-2	SAL1	器	縁	ナ	ハケヌ	ナ	葉・キンランモ	1872
247	D-2	SAL1	器	にかい縁	ナ	ハケヌ	ナ	葉・キンランモ	1872
248	D-2	SAL1	器	縁	ナ	ハケヌ	ナ	葉	1872
249	D-3	SAL1	器	にかい縁	ナ	ハケヌ	ナ	葉	1872
250	D-2	SAL1	器	にかい縲	ナ	ハケヌ	ナ	葉	1872
251	D-2	SAL1	器	縲	ナ	ハケヌ	ナ	葉	1872
252	E-2	SAL1	器	縲	ナ	ハケヌ	ナ	葉	1872
253	C-6	SAL1	器	にかい縲	ナ	ハケヌ	ナ	葉	1872
254	D-3	SAL1	器	にかい縲	ナ	ハケヌ	ナ	葉	1872
255	F-5	SAL1	器	にかい縲	ナ	ハケヌ	ナ	葉	1680
256	C-5	SAL1	器	にかい縲	ナ	ハケヌ	ナ	葉	385
257	C-3	SAL1	器	縲	ナ	ハケヌ	ナ	葉	385
258	D-6	SAL1	器	にかい縲	ナ	ハケヌ	ナ	葉	541
259	D-2	SAL1	器	にかい縲	ナ	ハケヌ	ナ	葉	541
260	E-12	SAL1	器	縲	ナ	ハケヌ	ナ	葉	152
261	D-3	SAL1	器	明鏡	ナ	ハケヌ	ナ	葉	270
262	D-3	SAL1	器	大腹?	ナ	ミガキ	ナ	葉	298
263	D-3	SAL1	器	にかい縲	ナ	ミガキ	ナ	葉	372
264	C-6	SAL1	器	縲	ナ	ミガキ	ナ	葉	349
265	D-3	SAL1	器	大腹?	ナ	ミガキ	ナ	葉	349
266	D-2	SAL1	器	縲	ナ	ミガキ	ナ	葉	637
267	D-4	SAL1	器	にかい縲	ス	ナ	ミガキ	葉	440
268	C-2	SAL1	器	にかい縲	ス	ナ	ミガキ	葉	25
269	D-6	SAL1	器	縲	ナ	ミガキ	ナ	葉	548
270	D-6	SAL1	器	縲	ナ	ミガキ	ナ	葉	940
271	E-3	SAL1	器	縲	ナ	ミガキ	ナ	葉	559
272	D-3	SAL1	器	にかい縲	ナ	ミガキ	ナ	葉	489
273	E-13	SAL1	器	手づくね	洗済	ユビオサエ	葉	212	

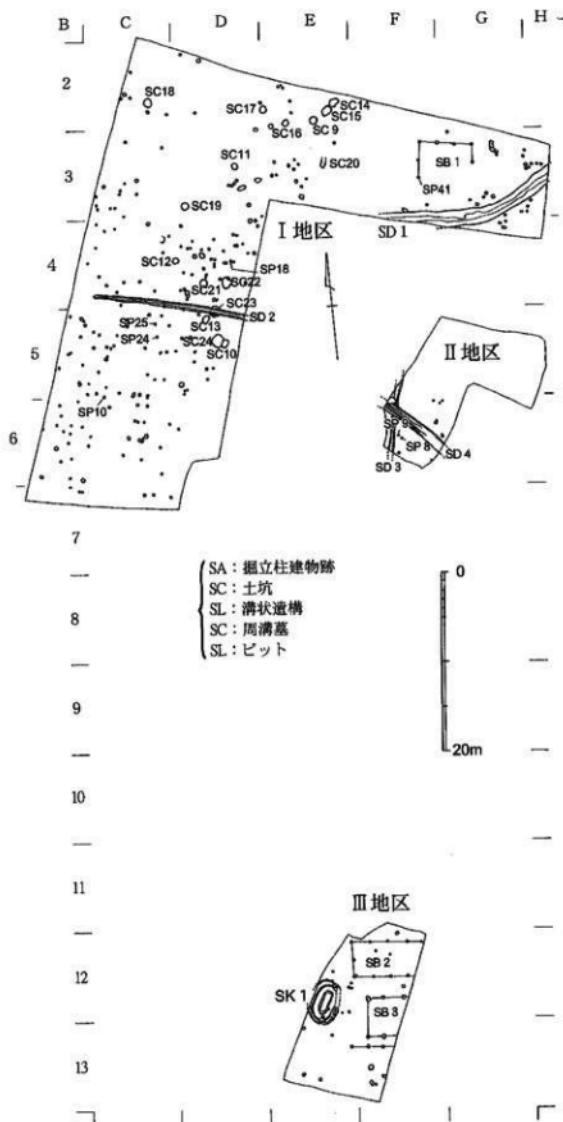


図37 中世遺構分布図

## 4. 中世

### (1) 遺構と遺物

中世の遺構は調査区域の全域からまんべんなく検出されている。特にピットは多数確認されたが、調査面積の制約もあって建物として認定できないものが多かった。

#### 【中世周溝墓（SK1）】 図38・39

北東部を現代のゴミ穴によって破壊され、西側の端が調査区外へと続いているが、全体像は把握できる。長楕円形プランの周溝に囲まれた内側に土塙を伴っている。周溝外周径は長軸4.9m・短軸3.2m以上で、長軸の方向は北東—南西である。溝は溝幅70～40cm・検出面からの深さ15～10cmである。南端でいったん切れているが、陸橋部分はつくり出されていない。また、東南側の一部がやや幅広くなっている。溝底も約30cmほど低くなり楕円形状となっているが、溝との切り合い関係は認められなかった。その上部の遺構検出面から20～10cm浮いたレベルに自然縛7個と土師器片1点（304）が出土しており、その50cmほど北の溝上部にも、遺構検出面から10～5cm浮いたレベルに土師器の完形品2点が出土している。1点は割れており

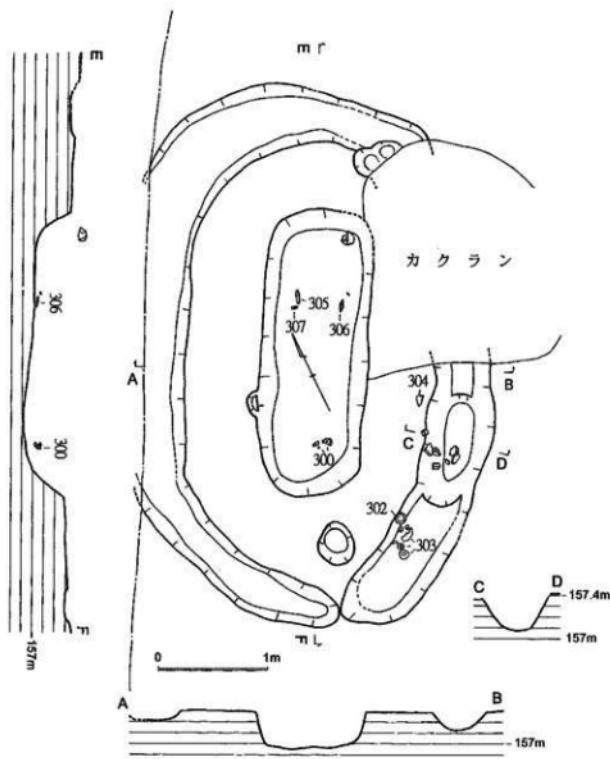


図38 中世周溝墓実測図

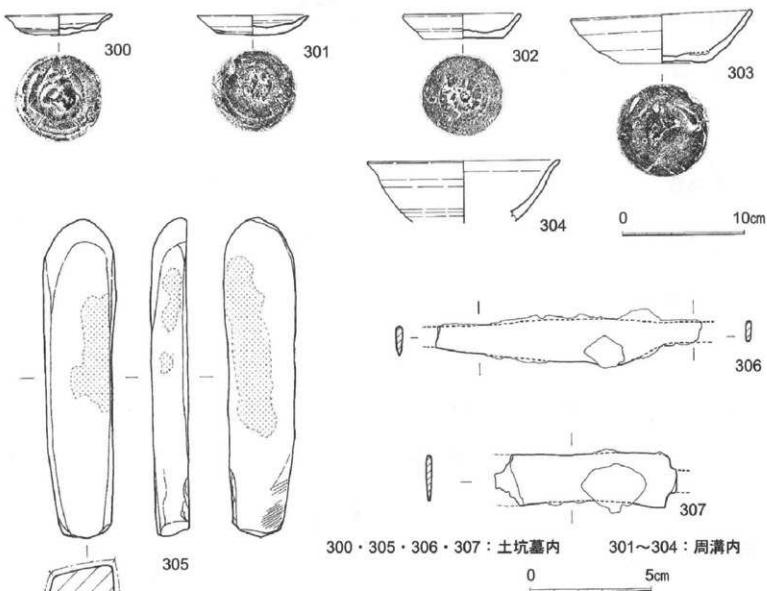


図39 中世周溝墓出土遺物実測図

(303)、1点は底面を上にした状態でみつかった(302)。なお、溝の切れた部分と土壤の間に直径35cm・深さ15cmのピットがあるが、その性格は不明である。周溝内側の土壤は長軸2.6m・短軸1mの隅丸長方形プランで、検出面からの深さ35~30cmである。土壤内の遺物の出土状態であるが、次の2つのパターンがある。土壤南側では、床面から12~10cm浮いた状態で土師器(300)がみつかっている。一方、中央のやや北側よりでは、床面から4~2cm浮いた状態で刀子(306)・鉄製工具(307)と砥石1点(305)がみつかっている。さらに、前者は1個体の土師器が割れており、やや傾斜しながら散乱した状態であるに対し、後者は水平な状態である。土壤内から釘が検出されていないため、木棺の可能性は薄いが、木室ないし木柳状の施設があり、その上部に木蓋があったと推定される。木蓋上に供獻されていた土師器(おそらく何らかの内容物があつただろう)が、木蓋が腐ると同時に下方へ沈下したものと考えられる。鉄製品と砥石は当初から遺体に添えてあったと考えられるが、床面から少し浮いているのは、その下に何らかの敷物があったが、木蓋が朽ちて土壤内に土が流れ込む過程で腐ってしまったことを示しているのだろう。遺体はおそらく刀子と鉄製工具・砥石とに挟まれた空間に北東ー南西軸で埋葬され、頭位は北東向きが想定される。ところで、先述した周溝上部の土師器と自然礫は、土壤上部を覆っていたと考えられる覆土(マウンドか?)の上に供獻・配置されていたものが、覆土の裾部がくずれ、溝が埋まっていくとともに溝上部に流れ込んだものと想定される。

300~304は土師器である。このうち300のみが土壤内から出土し、他は周溝上部から出土した。301は試掘調査の際、取り上げられていたもので、おそらく302・303とほぼ同じ位置から出土したものと思われる。300~303の底部切り離し技法はいずれもヘラ切り離しである。小皿300・301は底面が凸レンズ状に膨らみ、

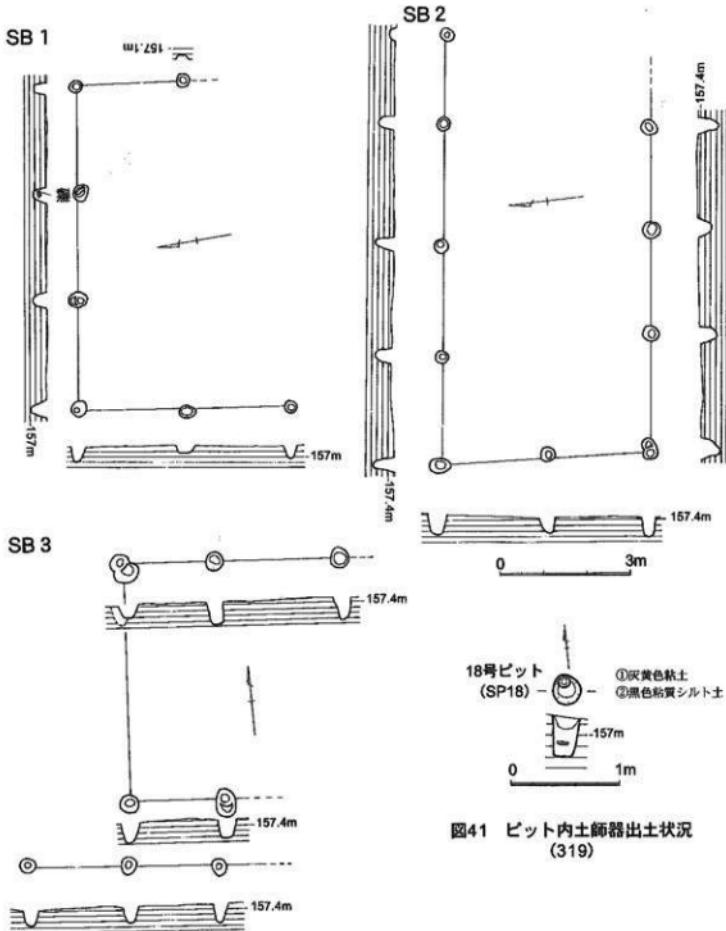


図40 摂立柱建物跡実測図

図41 ピット内土師器出土状況  
(319)

座りが悪い、調整も全体的に雑な印象を受ける。300の口縁部は丸くおさめられるが、301は先端に向かって先細りとなる。小皿302は前2者とは形態・胎土・調整が著しく異なるので、生産地が違うものと考えられる。303は坏で、底部から口縁部に向かって大きく開く体部をもつ。焼成によって灰色化している。304は高台付きの碗と考えられるが、底部を欠いている。口縁先端が小さく外反しており、内外面ともに丁寧なミガキが施されている。305は灰色の石材を利用した砥石である。部分的に鉄さびが付着して、赤褐色を呈している。4面ともに底面になっているが、実測図の右側の表面・裏面・右側面の3面は特によ

く使いこまれており、アミカケで示した部分には黒色の物質（油状？）が付着し、光沢がある。307は工具状？の鉄製品であり、305の砥石に隣接して出土した。茎？の端部と先端部を欠く。刃部は薄く、わずかに内彎している。306は刀子である。305・307とは東へ約35cm離れた位置で出土した。先端と茎の端部を欠く。

### [掘立柱建物跡]

#### 1号建物跡 (SB 1) 図40

東西棟の建物で、主軸はN-99°30' - Eである。梁間2間(5m)、桁行3間(7.4m)であるが、南側は現代の擾乱によって失われている。1つの柱穴の中位に根石が検出された。

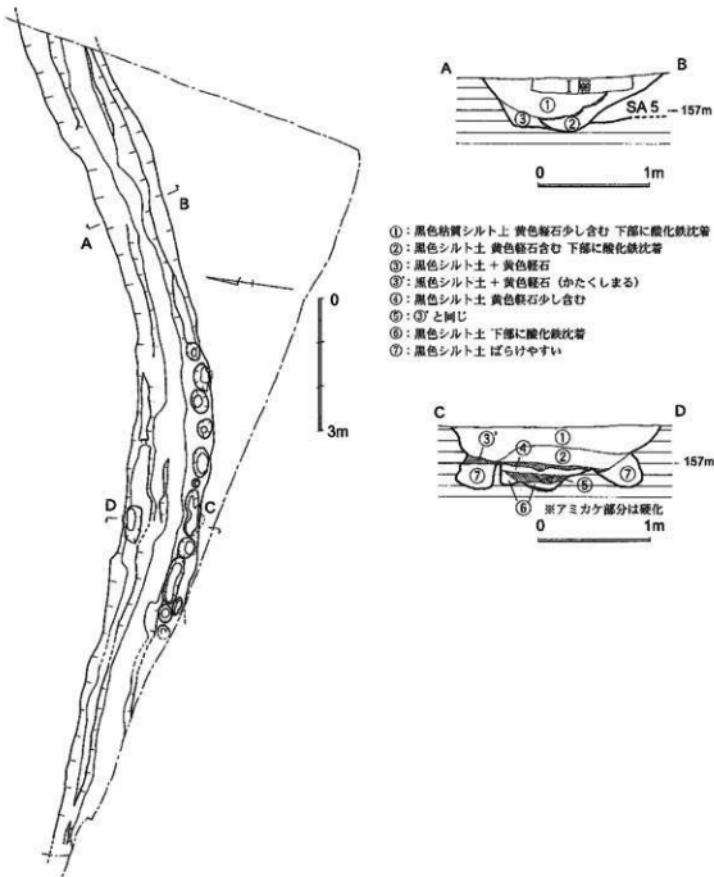


図42 1号溝状遺構実測図

### 2号建物跡 (SB 2) 図40

東側が調査区外へと続いたため全容は不明であるが、東西棟の建物で、主軸はN-96°40' - Eである。現状では、梁間2間(5m)、桁行4間以上(10m以上)である。

### 3号建物跡 (SB 3) 図40

SB 2と同じく、東側が調査区外へと続いたため全容は不明であるが、東西棟の建物で、主軸はN-94°00' - Eである。現状では、梁間1間(5.5m)、桁行2間以上(5m以上)である。南側に底もしくは橋列状のピットが3基並んでいる。

### 土師器埋納ピット 図41・45

上記の建物跡と認定された柱穴以外からではあるが、SP10とSP18のピット内から完形の土師器が1点ずつ検出されている(318・319)。これはピットが埋没する際に、偶然に紛れ込んだものではなく、おそらく地鎮・鎮壇に伴って埋納されたものとみられる。SP18では土師器の小皿(319)が直径約22mの柱掘方の中心よりや北側に寄せた位置で検出された。レベルは柱材の根腐れを防ぐために充填されたとみられる灰黄色粘土の下約10cm、ピット底から約10cm上のところであり、柱掘方を埋め戻す際に入れられたと考えられる。

### [土坑 (SC 9~24)]

I地区の北西部を中心に、円形もしくは椭円形プランの土坑が検出された。直径もしくは長径は1m前後で、いずれも掘り込みは検出面かららの深さが10cm前後と浅い。埋土はすべてⅢa層に該当する。遺物はいずれも固化できないが、SC 9・10・11から土師器片が、SC13からは常滑焼の甕の胴部片が出土している。

### [溝状遺構]

#### 1号溝 (SD 1) 図42・45・48

I地区のF・G・H-3区にまたがって、弧状に検出された。東側と西側が調査区外へと続いている。ただし、西側についてはI地区のD-3区に出てきていないため、途中で切れている可能性がある。溝幅1.9~1.3mで検出面からの深さ55~50cmである。溝の断面形は立ち上がりの傾斜の緩いU字状をなしている。土層断面観察の結果、少なくとも3度にわたる掘り直しが認められる。①・②・⑤層の直下には酸化鉄の沈着が認められ、溝底に一時的に水が溜まっていたことを物語っている。また溝がカーブを描く部分のC-Dラインの断面図付近では特に南側に椭円状の不整形ピットが多くみられ、これもやはり水の浸食作用によるものと考えられる。この地点の土層断面をみると②層の下位に舞島群池軽石を多く含んだ硬化層

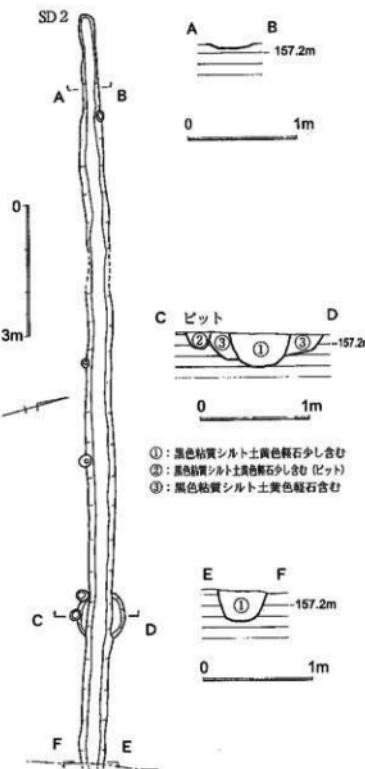


図43 2号溝状遺構実測図

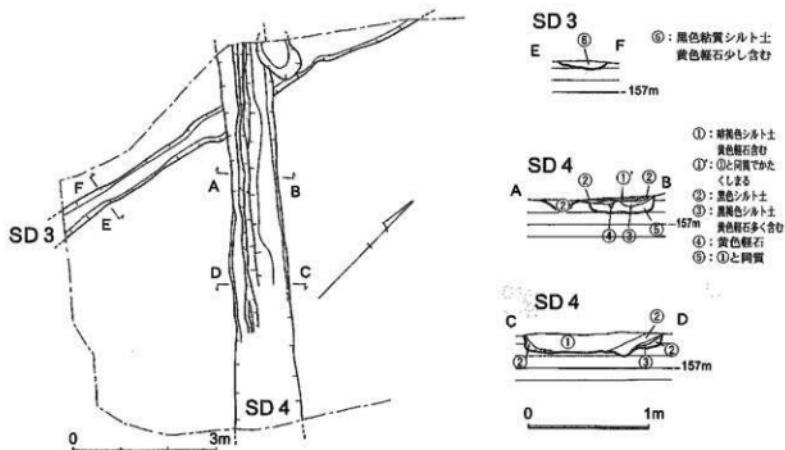


図44 3・4号溝状遺構実測図

が2枚形成されており、水の浸食によってえぐられた部分を2度にわたって補修したことがうかがえる。調査の経過と概要の項で述べたように、この一帯は雨が続くと水が溜まりやすいため、排水溝的な用途が考えられる。おそらく、調査区北東部にあった谷状地形に落とし込んでいたのであろう。

出土遺物には、土師器・砥石・鉄滓・自然礫などがある。308は土師器の甕で、内面にヘラ削り痕が認められる。309は土師器の小皿で、底部切り離しはヘラ切りである。310～312は土師器の坏で、310・311の底部切り離しが糸切りで、312はヘラ切りである。313は貼付けによる短い高台をもつ。内面は灰色を呈し、丁寧なミガキが施され、外面もミガキが認められる。347～349は砥石である。

#### 2号溝（SD 2） 図43

I地区のC-D-4・5区で検出された。東側は調査区外へ続くが、西側はC-4区で切れている。溝幅60~50cmで、検出面からの深さ30cmである。断面形はU字状を呈し、西へ行くほど浅くなる。溝内堆積土が後述するSD 3と一致するため、それと同時期、同一の溝状遺構とみられる。おそらくF-5区あたりで、南へ折れてSD 3へ続くものと考えられる。遺物の出土はなかった。

#### 3号溝（SD 3） 図44

II地区的F-5・6区で検出された。南側は調査区外へと続くが、北側は先述したように、SD 2に連続している可能性がある。溝幅55~40cm、検出面からの深さ10cmである。溝の断面形は皿状を呈する。遺物の出土はなかった。

#### 4号溝（SD 4） 図44・45・48

II地区的F-6区で検出された。SD 3と弥生時代の竪穴住居SAIIを切っている。西側と東側が調査区外へと続く。溝幅1.2~1mで、検出面からの深さ16~10cmである。溝の断面形は、基本的に箱型であるが、場所によっては複雑である。土層断面を観察すると2回にわたって掘り直された痕跡がある。A-Bライ

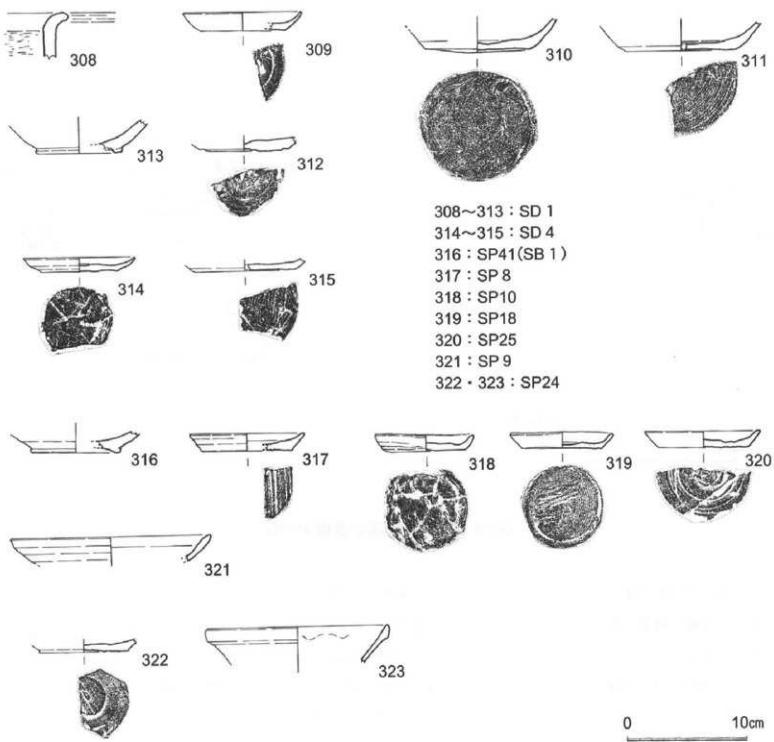


図45 溝状遺構・ピット出土遺物実測図

ンの断面図をみると、溝の上部に硬化層が形成されている。溝内から土師器と軽石製品が出土している。314は土師器の小皿で315は杯である。いずれも底部切り離しは糸切りである。351は軽石を加工したもので、一見、五輪塔の火輪部分に似るが、空風輪を接続する部分が認められない。下部には直径約9cm、深さ約5.5cmのほぞ穴がある。

#### [畝状遺構 (SU 1)] 図46

II地区のF-13区南東部において、重機でII層を取り除いた際、桜島文明軽石が筋状に落ち込んでいる状態が確認されたため、IIIa層上面で精査してその範囲をおさえた。するとほぼ東西方向に列状に並ぶものと、北西-南東方向に列状に並ぶものの2パターンが確認できたため畝状遺構としてとらえた。さらにその土層断面をよく観察すると、軽石層は1次堆積の状態ではなく、上層のII層土と下層のIII層土をまじえていた。その軽石混土層を取り除くと、不明瞭な楕円状の落ち込みが連続した状態で確認された。この痕跡は軽石降下後の耕作（畝立てなど）によって軽石が下位に沈下してきたものと考えられるが、それ

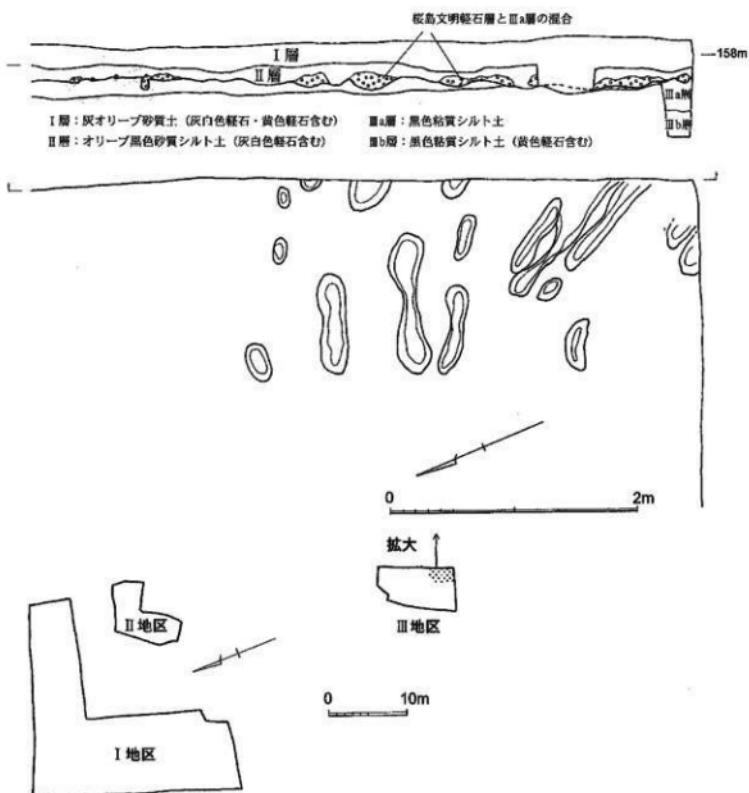


図46 鉢状遺構 (SU 1) 実測図

により形成されたはずの鉢についてはその後の数次にわたる耕作によりかなり攪拌・削平されている。なお、鉢状遺構の方向性の違いについては崖境を示す可能性があるが、範囲が狭小なため断定はできない。

## (2) 包含層出土遺物

### [土 師 器]

325は黒色土器Aである。坏326の底部切り離しはヘラ切りであり、大きく開く体部を特徴とする。小皿は、口径9~10cmのもの(327・328・330・331・335・336)と8~9cmのもの(332・337・338)との大きく2つのグループに分けられる。

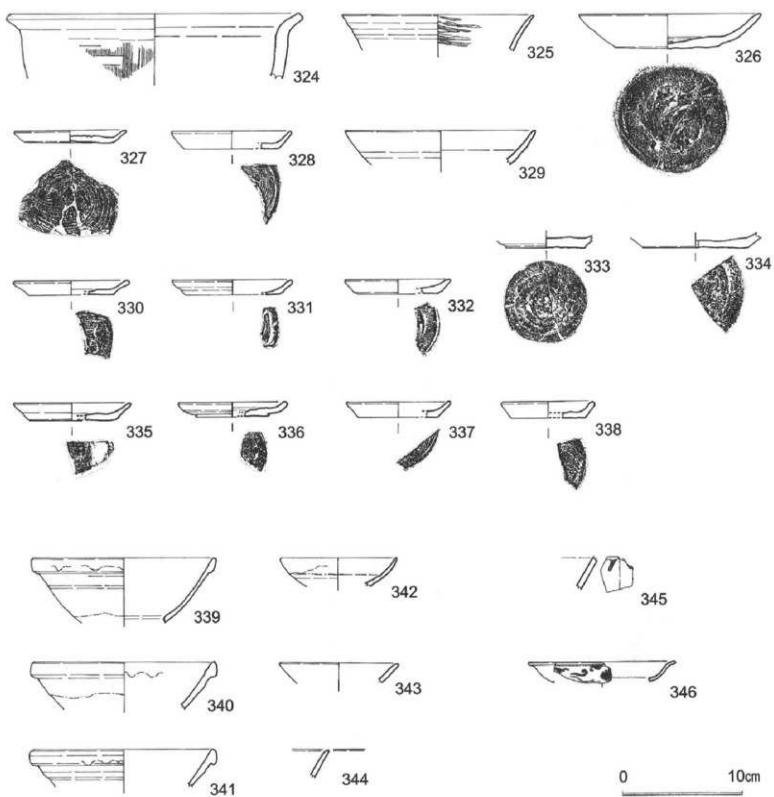


図47 包含層出土土師器・磁器実測図

### [陶磁器]

図化できなかったが、国内産の東播系片口鉢の胴部片2点が出土している。白磁は玉縁状口縁をもつ白磁碗（大宰府分類の白磁皿IV類）が目立っており（339～341）、図示した以外に他に2点出土している。342は白磁皿VI類で、343は白磁皿II類ないしIII類である。344は白磁皿V1類ないしⅥ類である。図化できなかったが、白磁皿IX類も1点出土している。345は龍泉窯系青磁の蓮弁文碗で、346は青花の皿である。

### [石製品]

350は滑石製石鍋片を再加工した製品である。口縁部の方形縦耳の部分を利用しており、2ヶ所に穿孔がある。

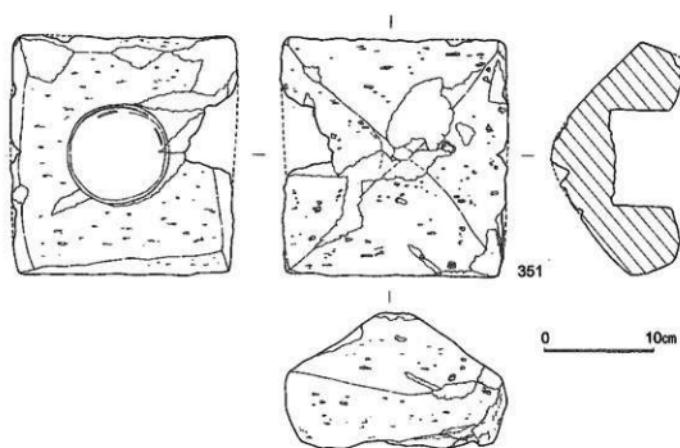
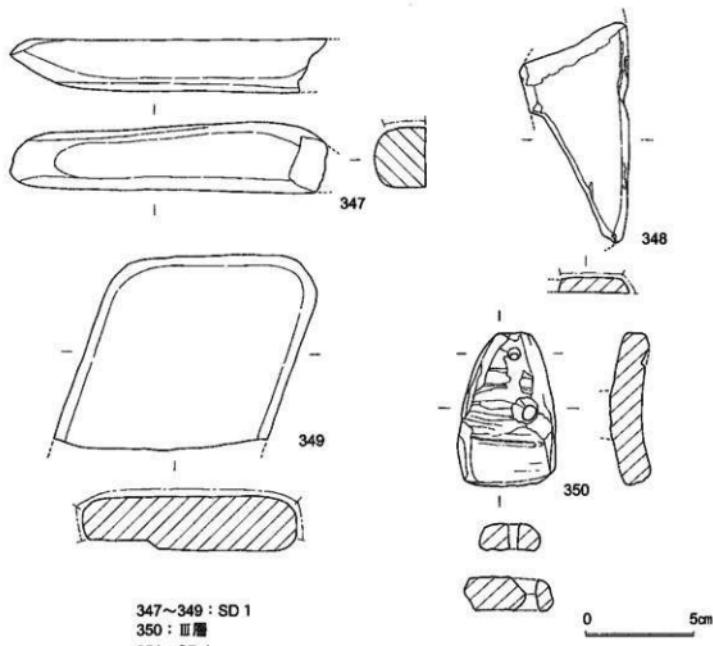


図48 中世石器・石製品実測図

表4 土師器・磁器観察表

同番号	出土区	遺物・層	種別	色調(黒漆の場合は地漆の色調)		調 整		底面切り 離し技法	取り上げ番号	備 考
				外	内	外	内			
300	E-12	SK1	土師器小皿	淡黄	淡黄	ロクロナデ	ロクロナデ		1038 1039	
301	E-12	SK1	土師器小皿	にぶい黄緑	淡黄	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ		
302	E-12	SK1	土師器小皿	灰黄	にぶい黄緑	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ	661	非常に丁寧なつくり
303	E-12	SK1	土師器杯	灰灰	黄灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ	662 663 664	
304	E-12	SK1	土師器杯	淡黄	淡黄	ミガキ	ミガキ	ヘラ	667	高台付
308	G-3	SD1	土師器皿	にぶい黄緑	灰黄褐	ミコナデ	ミコナデケイロ		978	
309	G-3	SD1上層	土師器小皿	灰白	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ			
310	G-3	SD1	土師器杯	灰白	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ	915	
311	G-3	SD1	土師器杯	にぶい黄緑	にぶい黄緑	ロクロナデ	ロクロナデ	糸	977	
312	G-3	SD1	土師器杯	黄灰	灰黄褐	ロクロナデ	ロクロナデ	糸	924	
313	G-3	SD1	土師器杯	灰白	黄灰	ミガキ	ミガキ	ヘラ	1730	高台付
314	F-6	SD4	土師器小皿	にぶい黄緑	にぶい黄緑	ロクロナデ	ロクロナデ		1670	
315	F-6	SD4	土師器杯	淡黄褐	淡黄褐	ロクロナデ	ロクロナデ	糸・板状圧痕	1675	
316	F-3	SP41(SB1)	土師器柄	灰	灰	ミガキ	ミガキ	糸・板状圧痕	1840	高台付
317	R-6	SP8	土師器小皿	淡黄褐	にぶい橙	ロクロナデ	ロクロナデ		1881	
318	C-5	SP10	土師器小皿	にぶい黄緑	にぶい黄緑	ロクロナデ	ロクロナデ	糸・板状圧痕	1837	
319	D-4	SP18	土師器小皿	浅黄褐	浅黄褐	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ	1836	
320	C-5	SP25	土師器小皿	浅黄褐	浅黄褐	ロクロナデ	ロクロナデ	糸・板状圧痕	1810	
321	F-6	SP29	土師器杯	浅黄褐	浅黄褐	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ	1882	
322	C-5	SP24	土師器杯	浅黄褐	浅黄褐	ロクロナデ	ナデ	ヘラ・板状圧痕	1809	
323	C-5	SP24	白磁碗	灰白	灰白				1809	白磁碗IV層施底座?
324	D-2	Ⅲ層	土師器甕	にぶい黄緑	にぶい黄緑	ハケス	ナデ		646	
325	E-3	Ⅲ層	土師器甕	にぶい黄緑	瓶	ミガキ	ミガキ		559	黒色土罐A類・高台付?
326	G-3	Ⅲ層	土師器甕	灰黄褐	にぶい瓶	ロクロナデ	ロクロナデ		1191	
327	D-3	Ⅲ層	土師器小皿	にぶい橙	にぶい橙	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ	613	
328	D-3	Ⅲ層	土師器小皿	にぶい橙	にぶい橙	ロクロナデ	ロクロナデ	糸	796	
329	E-3	Ⅲ層	土師器碗	灰黄褐	にぶい黄緑	ロクロナデ	ロクロナデ	糸	1170	
330	E-3	Ⅲ層	土師器小皿	にぶい橙	浅黄褐	ロクロナデ	ロクロナデ		561	
331	D-3	Ⅲ層	土師器小皿	にぶい橙	浅黄褐	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ・板状圧痕	610	
332	D-2	Ⅲ層	土師器小皿	にぶい黄緑	にぶい黄緑	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ	33	
333	E-3	Ⅲ層	土師器杯	にぶい橙	にぶい橙	ロクロナデ	ナデ	ヘラ	567	
334	E-3	Ⅲ層	土師器甕	灰白	灰白	ロクロナデ	ナデ	ヘラ	566	
335	試掘II TR	Ⅲ層	土師器小皿	にぶい橙	にぶい橙	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ		
336	試掘II TR	Ⅲ層	土師器小皿	にぶい橙	浅黄褐	ロクロナデ	ナデ	ヘラ		
337	E-3	Ⅲ層	土師器小皿	にぶい黄緑	にぶい黄緑	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ	576	
338	E-3	Ⅲ層	土師器小皿	にぶい黄緑	にぶい黄緑	ロクロナデ	ロクロナデ	糸	587	
339	C-5	Ⅲ層	白磁碗	灰白(下半黒胎)	灰白				1865	白磁碗IV層
340	D-2	Ⅲ層	白磁碗	浅黄(下半黒胎)	灰白				32	白磁碗IV層
341	D-3	Ⅲ層	白磁碗	灰白	灰白				608	白磁碗IV層
342	E-13	Ⅲ層	白磁碗	灰白	浅黄				197	白磁碗V1a・広葉形
343	F-12	Ⅲ層	白磁碗	灰オリーブ	灰オリーブ					白磁碗II・III類
344	F-13	Ⅲ層	白磁碗	灰白	灰白				1028	白磁碗V1層・VII類
345	F-12	Ⅲ層	青磁碗	青灰	青灰				265	龍泉窯系青磁碗I・5b類
346	F-13	Ⅲ層	染付瓶	灰白	灰白				238	青花皿

## 第4章 自然科学分析

株式会社 古環境研究所

### 1. 出土炭化材の放射性炭素年代測定結果

#### ①試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No 1	池ノ友 1次調査 A区 (H-3) 5号住居内	炭化材 (ネムノキ)	酸-7剤-酸洗浄、ベンゼン合成	$\beta$ 線法

#### ②測定結果

試料名	$^{14}\text{C}$ 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 $^{14}\text{C}$ 年代 (年BP)	曆年代 交点 ( $1\sigma$ )	測定No (Beta-)
No 1	$2010 \pm 60$	-24.5	$2010 \pm 60$	AD 5 (BC50~AD70)	122260

#### 1) $^{14}\text{C}$ 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在（1950年AD）から何年前（BP）かを計算した値。 $^{14}\text{C}$ の半減期は5,568年を用いた。

#### 2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比（ $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

#### 3) 補正 $^{14}\text{C}$ 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正值を加えた上で算出した年代。

#### 4) 曆年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 $^{14}\text{C}$ 濃度の変動を補正することにより算出した年代（西暦）。補正には年代既知の樹木年輪の $^{14}\text{C}$ の詳細な測定値を使用した。この補正是10,000年BPより古い試料には適用できない。曆年代の交点とは、補正 $^{14}\text{C}$ 年代値と曆年代補正曲線との交点の曆年代値を意味する。 $1\sigma$ は補正 $^{14}\text{C}$ 年代値の偏差の幅を補正曲線に投影した曆年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の $1\sigma$ 値が表記される場合もある。

## 2. 出土炭化材の樹種同定

### ①試料

試料は、A区（H-3）の弥生時代堅穴住居5号内から出土した炭化材（No1695）である。

### ②方法

試料を割折して新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、落射顕微鏡によって75～750倍で観察した。樹種同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

### ③結果

分析の結果、マメ科のネムノキ (*Albizzia julibrissin* Durazz.) と同定された。以下に同定根拠となった特徴を記し、各断面の顕微鏡写真を示す。

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管が数列配列する環孔材である。孔圈部外の道管は、単独あるいは放射方向に2～3個複合する。道管の径は早材から晚材にかけてゆるやかに減少する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔である。放射組織は同性で、すべて平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、1～3細胞幅である。

### ④所見

A区（H-3）の弥生時代堅穴住居5号内から出土した炭化材（No1695）は、ネムノキであった。ネムノキは本州、四国、九州、沖縄の河川や谷沿いに分布する落葉高木である。通常高さ5～10m、径20～30cmであるが、大きいものは、高さ20m、径40cmに達する。材の耐朽、保存性は低いが、建築、器具、ろくろ細工、薪炭などに用いられる。

## 文 献

佐伯浩・原田清（1985）針葉樹材の細胞、木材の構造、文光堂出版、p.20-48.

佐伯浩・原田清（1985）広葉樹材の細胞、木材の構造、文光堂出版、p.49-100.

## 第5章 まとめ

### 1. 弥生時代

弥生時代の包含層と遺構は、中世の遺構や現代の擾乱によって、部分的な影響を受けており、また調査範囲の制約もあって、集落跡の全容をとらえることはできなかった。しかし、弥生時代でも中期後半という集落跡の調査は早水町内においてはじめての事例であり、また、瀬戸内系の凹線文をもつ壺の出土は都城市内において初例で、該期の交流を知る上で貴重な資料となった。ここでは、出土土器の時期設定を再度検討した上で、集落跡の変遷を追ってみる。

#### (1)出土土器の時期

先述したように今回の調査で出土した弥生土器はおおむね中期後半を中心とした時期のものである。ただし、第3章の遺構と遺物の項で述べたように、遺構ごとの出土資料を比較すると、特に壺について、それぞれに違いが認められ、ある程度の時間差を考慮する必要がある。以下、指標となる出土資料を抽出して検討してみる。

SA 9からまとまって出土した口縁部に台形状突帯をもつ壺の一群はほぼ中園聰氏の山ノロⅠ式にあたる（中園1997）。これには口縁部外面に暗文をもつ広口壺などが伴う。また、客体的存在である下城式系壺との共伴も認められる。対して、SA 1・SA 6・SA 5からまとまって出土した口縁が折れて外反し、口縁部の下位に突帯をもつ壺の一群は中溝式と呼ばれるものである（田中1975）。中溝式は中園聰氏の山ノロⅡ式と併行関係にあることが確実なので（長津1985）、SA 9出土土器はSA 1・SA 6・SA 5出土土器よりも古く位置付けられる。先述したように、本遺跡の中溝式壺をさらに細かくみると、SA 1・SA 6出土土器とSA 5出土土器とは、口縁部の内面の稜や長さにおいて違いが認められる。今回は口縁内面の稜がシャープな前者を古く、口縁が長く内面の稜が鈍い後者をより新しいタイプと考えた。したがって上記の出土資料は、SA 9→SA 1・6→SA 5という先後関係が推察される。これらを便宜的に古い方から第1期、第2期、第3期とする。

ところで、山ノロⅠ式と山ノロⅡ式は須玖式（II式）との共伴関係によって從来から中期後半に位置付けられている（河口1981・中園1997）。一方、中溝式壺については、新田原遺跡（宮崎県新富町）で瀬戸内系凹線文土器（瀬戸内第IV様式）との共伴関係が確認され、瀬戸内第IV様式を北部九州の後期初頭に対応させるとする学史的な考え方から、後期前葉に位置付ける向きもあった（石川1984）。しかし、近年、先述した山ノロⅡ式との関係を再評価する動き（中園1993）や須玖Ⅱ式そのものとの共伴が確認される（谷口1991）において、中期後半に位置付けなおされつつある（1998年に開催された宮崎考古学会第36回例会における石川悦雄氏の発表など）。ただし、本遺跡でみられたように、中溝式については細分の余地があるし、銀代ヶ迫遺跡（宮崎県新富町）の中溝式系壺と瀬戸内第V様式の器台との共出事例（近藤1992）も考慮すると、中期後半から後期前葉までという幅でとらえられる可能性も残されている。今後、確実な資料の蓄積を待って検討すべきであろう。

なお、都城市内においてはじめての検出例となった凹線文をもつ壺（SA 9の163とSA 11の188）についてであるが、梅木謙一氏のご教示によると、氏の中期Ⅲ（中期末）の段階にあたり、伊予地方ないし備後南部の島嶼部からの搬入品の可能性が強いとのことである。SA 9においては覆土の上部から出土しているので、第1期に伴う可能性は低い。一方、SA 11では覆土下部・床面直上において山ノロⅡ式との共伴がみられた。したがって、第2期にもたらされたとするのが妥当であろう。

#### (2)遺構の変遷

遺構の切り合い関係をみた上で、各遺構内出土土器を上記の土器編年で照らし合わせ、それぞれの遺構

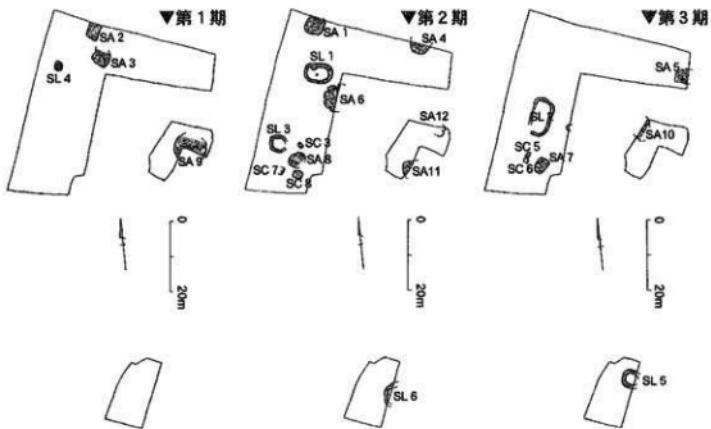


図49 弥生時代遺構変遷図 ※アミカケはほぼ確実なもの、白ヌキは不確実なもの

の埋没した時期を推定した結果、図49のような遺構の変遷がとらえられた。

調査範囲が集落跡の全域をカバーしていないという制約もあって、断定的なことは言えないが、住居跡などの諸遺構の分布状況が時期を追うごとに北から南へ移り変わっていく様子が読み取れる。

住居跡については、第1期に円形プランの最大規模の住居であるSA9（直径9.3m）が廃棄される。第1期から第2期にかけて突出壁をもつてゆる花弁状住居（SA1・6・12）が構築され、それと同時にI地区の南側に袋状土坑（SC3・7）が配置されるようである。

周溝状遺構として一括した遺構群の形状にはいくつかのヴァリエーションがあり、これらをすべて同一の性格ととらえることには躊躇する。第1期には非常に小規模のC字状プランのものがある。第1期から第2期にかけて楕円状プラン（SL1）と隅丸方形プラン（SL3）の2者が同時存在しているのは確実であり、第3期にもその2つのタイプが繼承されていくようである（SL5・SL2）。楕円状プランのSL1は内部にビットが1基と北西部に浅い土坑を伴っている。その土坑を中心に溝内からも多数の小石が検出されており、その性格をうかがう上で注目される。また、溝の底面に2ヶ所の段差が認められる。このような底面のあり方は同じ楕円状プランのSL2にも認められ、全容が不明で平面プランを断定できないが、SL6にもある。なお、SL2は南西部で溝が切れており、ブリッジを有していた可能性がある。隅丸方形プランのSL5はSL6を切っており、溝内堆積土の上部からは土器とともに炭化材も検出されている。

## 2. 中世

第2章の位置と環境でも述べたように、本遺跡一帯は中世以降の遺跡が集中しているところであり、特に中世前半の開発拠点とみられている。今回の調査によっても、調査区内において比較的高い密度で遺構が検出された。また、現代の擾乱によって、包含層が削平されるなど、かなりの影響があったにもかかわらず、年代の指標となる遺物も得ることができた。中でも11世紀代に位置付けられる周溝墓は、いまだに発掘事例が少なく不明な点の多い島津荘成立期（万寿年間・11世紀前半）の遺構であり注目される。

### (1)出土土師器の時期

周溝墓SK 1 からは良好な資料が得られた。主体部土壙から土師器小皿 1 点、周溝から土師器小皿 2 点・壺 1 点・楕 1 点がそれぞれ出土したが、ほぼ同時期の一括資料としてとらえられる。小皿は 302 を除くと口径 9 cm 前後、底部はヘラ切りでレンズ状を呈する (300・301)。また、壺もやはりヘラ切りの比較的小さな底部から大きく外へ広がる体部をもつ (303)。これに内外面にミガキの施された高台付楕 (304) が伴う。このような各器種の特徴と構成は、岡本武憲氏が九州南部の 11 世紀代に位置付けたグループに最も近い (岡本 1995)。他方、SD 1 や SD 4 からは底部糸切りの小皿・壺が出土しており、SK 1 出土資料とは形態や法量に違いが認められる。また、各ピットから出土した小皿 (317~320) は口径 8.4~10 cm まではらつきがあり、底部もヘラ切りと糸切りの二者があり、やはり SK 1 とは時期差が考えられる。このことは掘立柱建物跡 (SB 1・2・3) の棟軸方向と SK 1 の長軸方向にずれがあることと相關しているようである。さらに、包含層とピットから出土した資料であるが、貿易磁器を見ると、大宰府分類の白磁楕 IV 類を主体として、白磁楕 II・III・VI 類などがあり、おおむね山本信夫氏の C 期 (大宰府土器編年の中 II~X III 期・11 世紀後半~12 世紀前半) にあたることができる。生活遺構 (掘立柱建物跡・溝状遺構など) から出土した土師器は SK 1 出土土師器に後出するものであろう。

## (2) 周溝墓について

中世の周溝墓は都城市内でははじめての検出例であった。山本信夫氏のご教示によれば、このタイプの墓制は九州において大宰府土器編年の X・XI 期 (10 世紀後半~11 世紀前半) に流行することである。同時代の事例を周辺地域に探すと、宮崎県えびの市平原遺跡で 1 基 (吉本 1994) と鹿児島県鹿屋市樅崎 A 遺跡で 5 基 (中村 1992) 見つかっており、樅崎 A 遺跡では、平面プランが円形 (1・2 号)・楕円形 (3・5 号)・略方形 (4 号) の 3 タイプあり、円形→楕円形→略方形へという変遷案が示されている。この中で鉄釘の出土から木棺が推定された周溝墓 5 号が SK 1 の平面プランと類似しているが、同周溝は長径 4.6 m・短径 3.12 m、土壙の長軸 2 m・短軸 0.85 m であり、SK 1 の方が規模において一回り大きい。

ところで、平原遺跡と樅崎 A 遺跡の副葬・供獻品は土師器や紡錘車などであり、SK 1 のような鉄製品などの副葬は認められないようである。SK 1 の遺体に添えられてあったとみられる刀子と用途不明の鉄製品、そしてかなり使い込まれた砥石のセットは被葬者像を物語っているように思われる。

## [引用・参考文献]

- 石川悦雄1984『宮崎平野における弥生土器編年試案―高播 (ML II) ー』『宮崎考古』第 9 号 宮崎考古学会  
梅木義一1995『西瀬戸内地方における弥生中期の土器様相』『古文化叢書』第 34 集 九州古文化研究会  
岡本武憲1995『九州南部』『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真蔵社  
河口貞徳1981『新南九州弥生土器集成』『鹿児島考古』第 15 号 鹿児島県考古学  
近藤義1992『銀代ヶ道遺跡』新富町文化財調査報告書 第 13 集 宮崎県新富町教育委員会  
田中茂1975『宮崎県出土の丹彩袋状口鉢兼土器について』『研究紀要』昭和 49 年度 宮崎県総合博物館  
谷口武範1991『樅崎遺跡』宮崎県東郷町教育委員会  
中國聰1993『様式論と南九州弥生時代中期土器』『鹿児島考古』第 27 号 鹿児島県考古学会  
中國聰1997『九州南部地域弥生土器編年』『人類史研究』第 9 号 人類史研究会  
中村和美1992『樅崎 A 遺跡』鹿児島県埋蔵文化財調査報告書 (63) 鹿児島県教育委員会  
長律宗盛1985『堂地東遺跡』宮崎市埋蔵文化財調査報告書第 4 号 宮崎県教育委員会  
山本信夫1995『中世前期の貿易陶磁器』『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真蔵社  
吉本正典1994『平原遺跡』九州縦貫自動車道 (人吉~えびの間) 建設工事にともなう埋蔵文化財調査報告書第 2 集 宮崎県教育委員会

## 報告書抄録

ふりがな	いけのとも いせき だいいちじょうさ					
書名	池ノ友遺跡(第1次調査)					
副書名						
卷次						
シリーズ名	都城市文化財調査報告書					
シリーズ番号	第49集					
編著者名	桑 煙 光 博					
編集機関	宮崎県都城市教育委員会					
所在地	宮崎県都城市姫城町6街区21号					
発行年月日	2000年3月31日					
ふりがな 所収遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	面積	調査原因
いけのとも 池ノ友	みやざきけん 宮崎県 みやこのじょうし 都城市 はやみずちょう 早水町 4529-2ほか	31° 43' 45"	131° 05' 50"	1993年7月20日 ~ 1993年10月15日	1800m <sup>2</sup>	公園整備 事業
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
池ノ友遺跡 (第1次)	集落跡	弥生時代 中期後半	竪穴住居跡 周溝状遺構 土坑	弥生土器 磨製石器 砥石 石庖丁 輕石加工品	竪穴住居跡から 瀬戸内系凹線文土器出土	
	耕作地	中世	掘立柱建物跡 周溝墓 土坑 溝状遺構 段状遺構	土師器 白磁 刀子 砥石 滑石製品 輕石加工品		

図版 1



調査区全景（真上から）

## 図版 2



調査区遠景（東上空から）

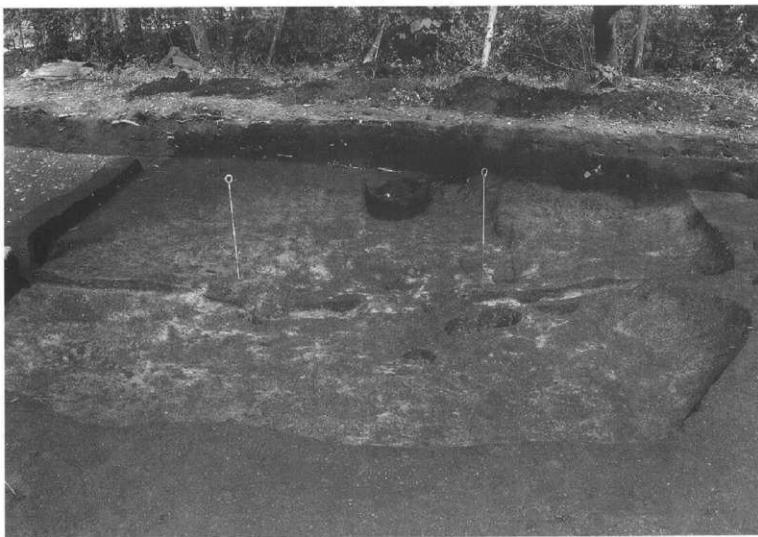


1号住居跡土層断面

図版 3



1号住居跡土器出土状況



1号住居跡完掘状況

## 図版 4



2号住居跡上層土器出土状況

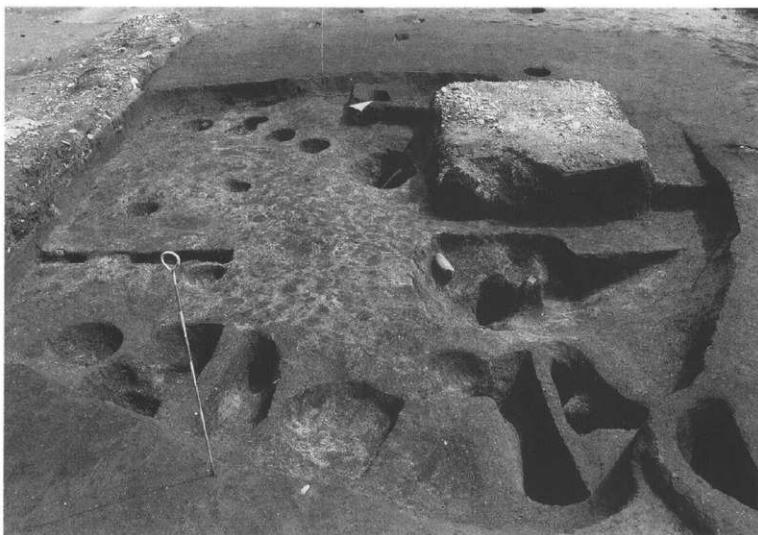


2号住居跡調査状況

图版 5



3号住居跡遺物出土状況



3号住居跡完掘状況

## 図版 6



4号住居跡完掘状況



5号住居跡遺物出土状況

图版 7



6号住居跡調査状況



6号住居跡土器出土状況

## 図版8



9号住居跡調査状況



9号住居跡土器出土状況

図版 9

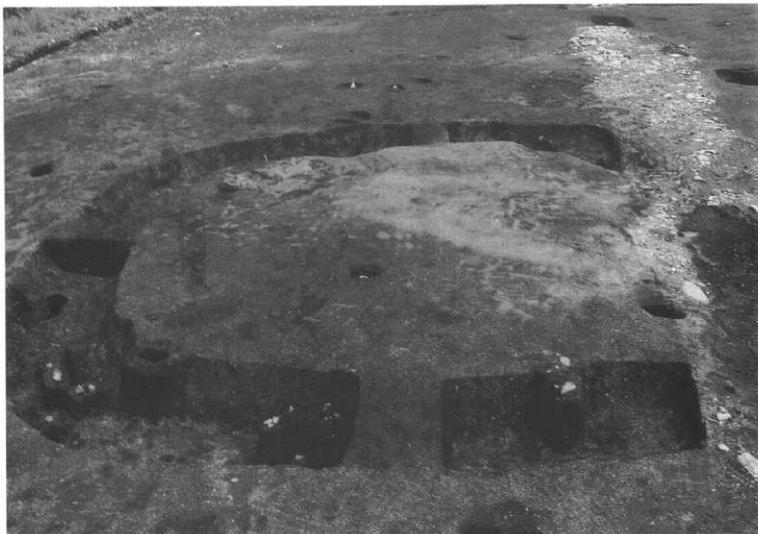


1号周溝状遺構遺物出土状況

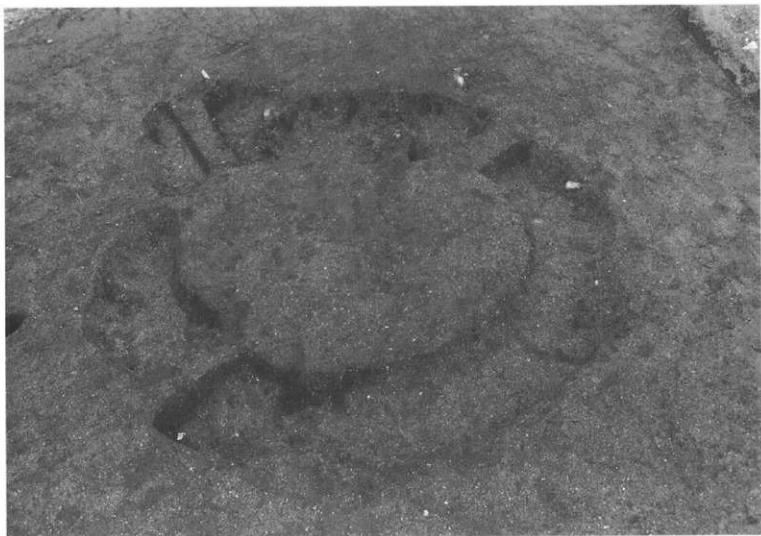


1号周溝状遺構に付属する土坑検出状況

## 図版10



3号周溝状遺構遺物出土状況



4号周溝状遺構完掘状況

図版11



中世周溝墓完掘状況



中世周溝墓内土壤遺物出土状況

## 図版12

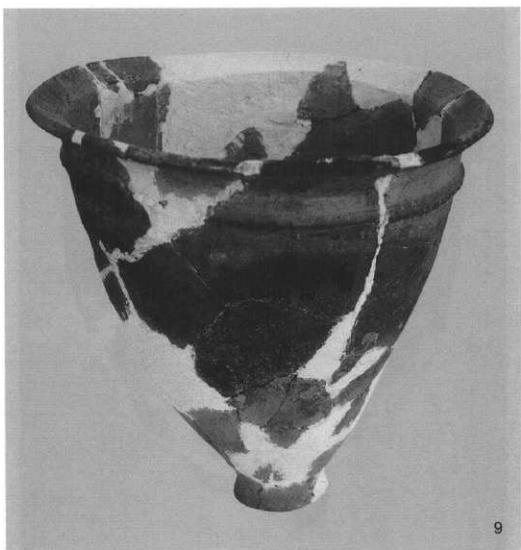


桜島文明軽石の落ちこみ（畦状遺構）

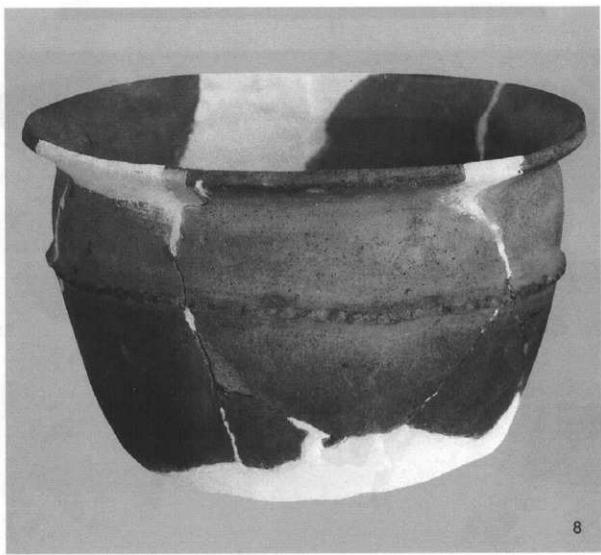


桜島文明軽石直下畦状遺構（軽石除去後）

図版13



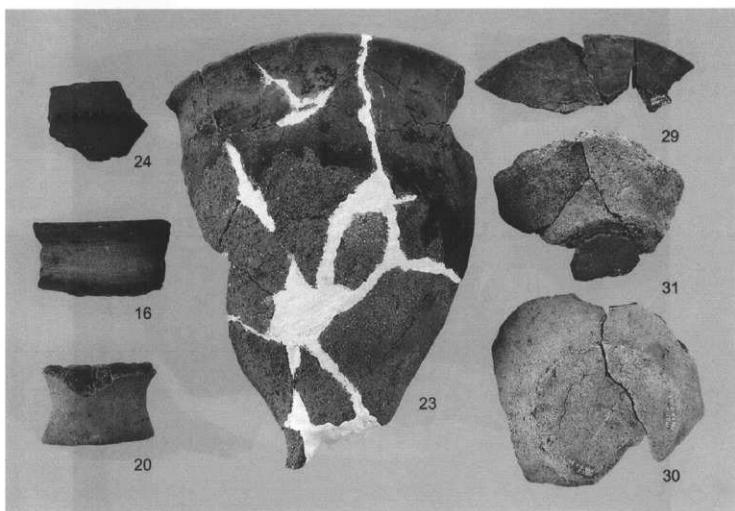
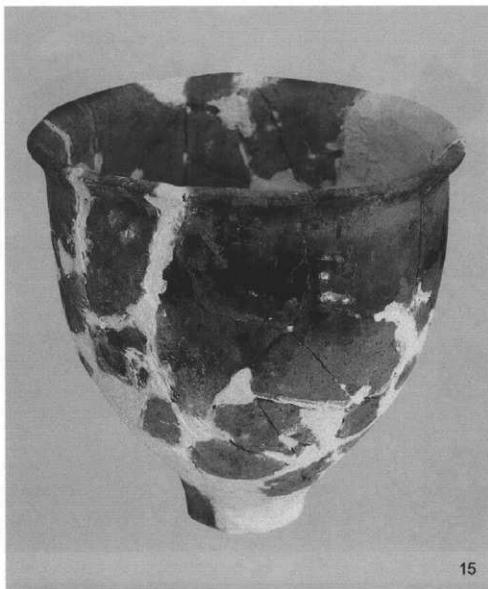
9



8

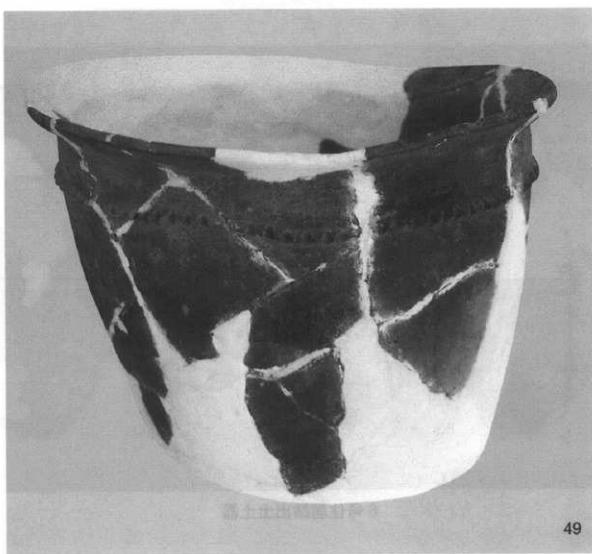
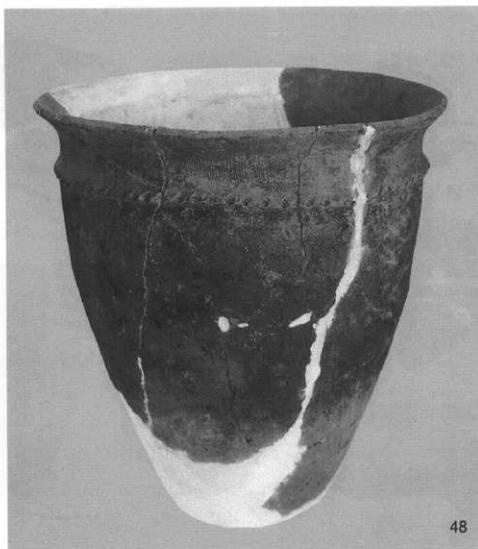
1号住居跡出土土器

図版14



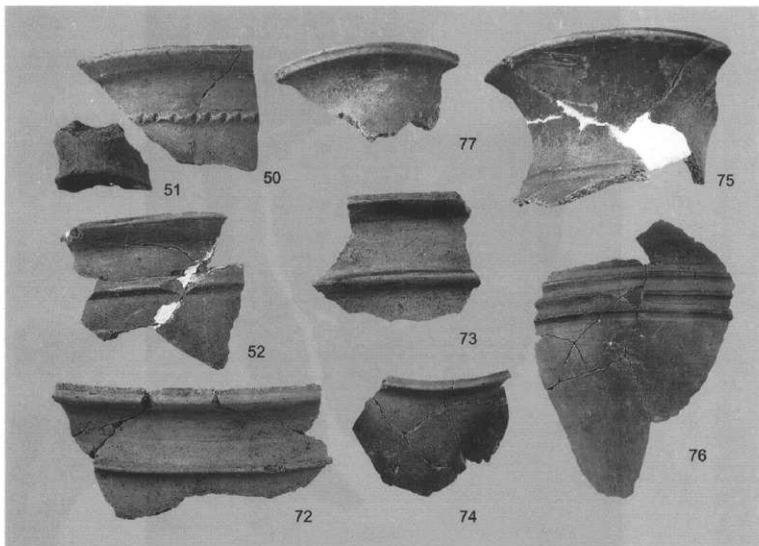
2号住居跡出土土器

図版15

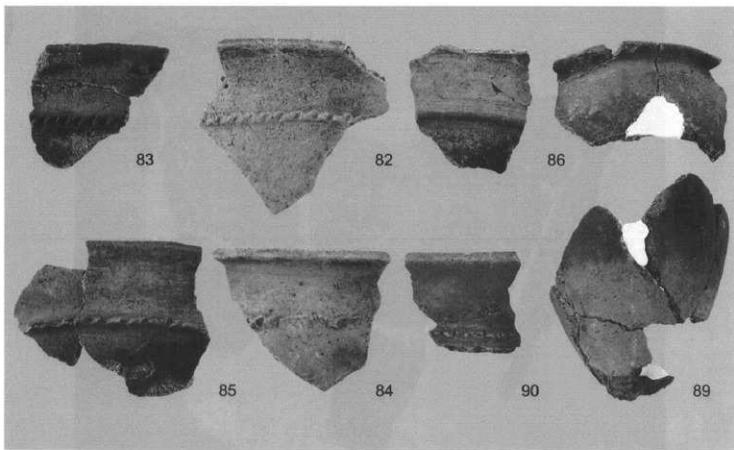


5号住居跡出土土器

## 図版16

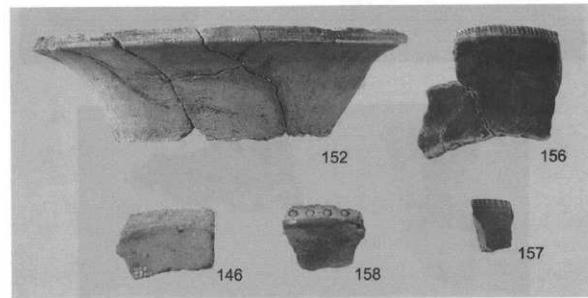
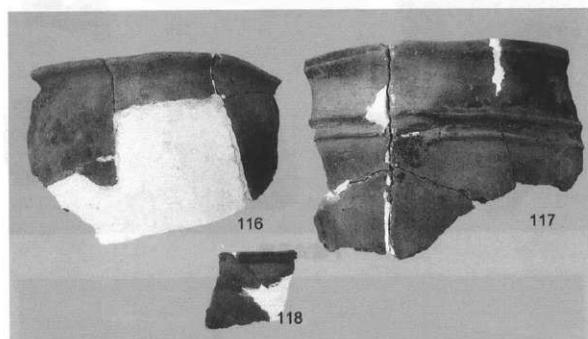
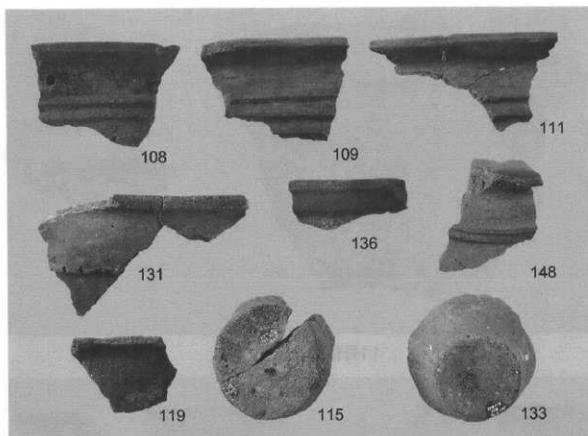


5号居住跡出土土器



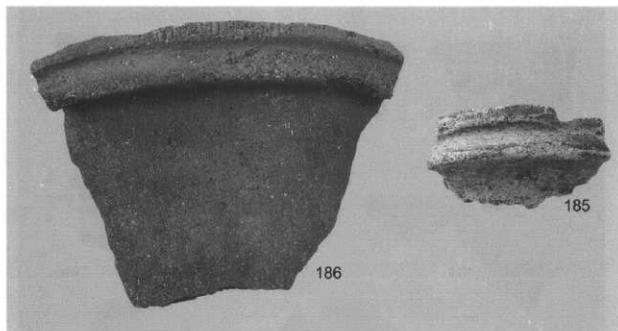
6号居住跡出土土器

図版17

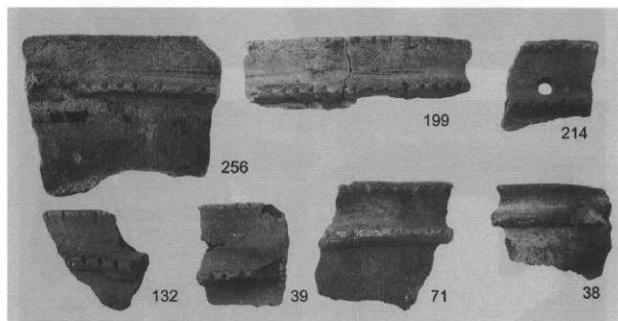


9号住居跡出土土器

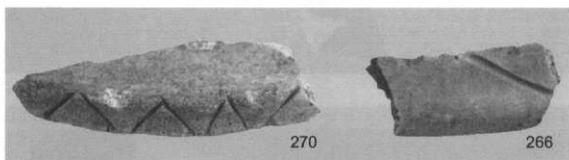
## 図版18



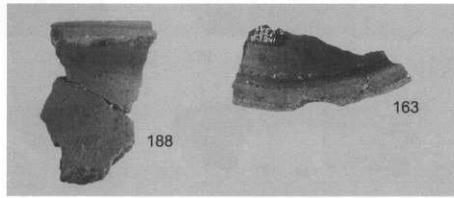
11号住居跡出土土器



下城式系壺

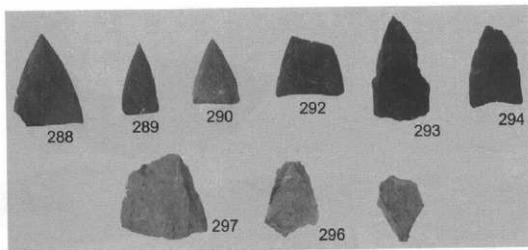


鋸歯文をもつ壺

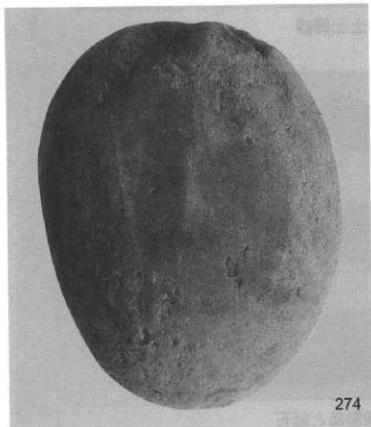


瀬戸内系凹線文土器

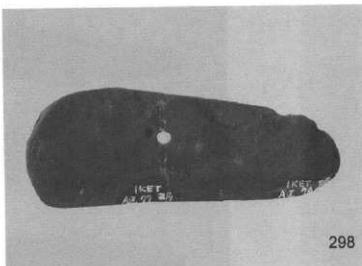
図版19



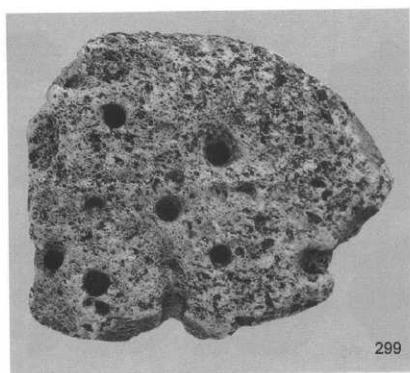
磨製石鏃および未製品



砥石

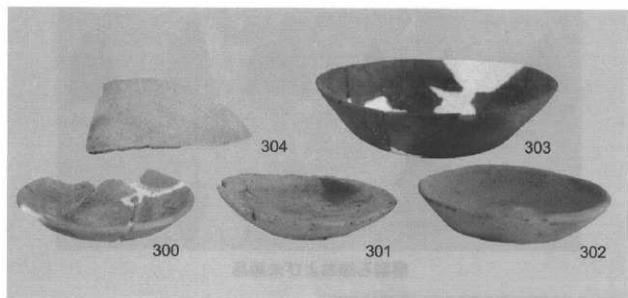


石庖丁

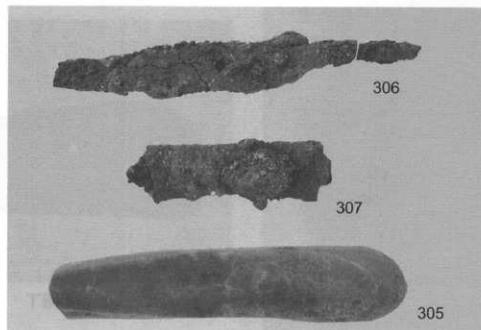


輕石製品

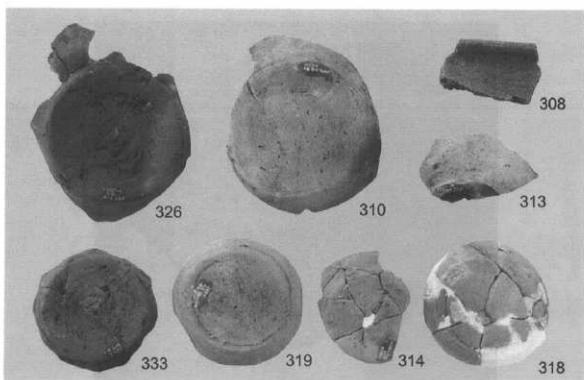
## 図版20



中世周溝墓出土土師器

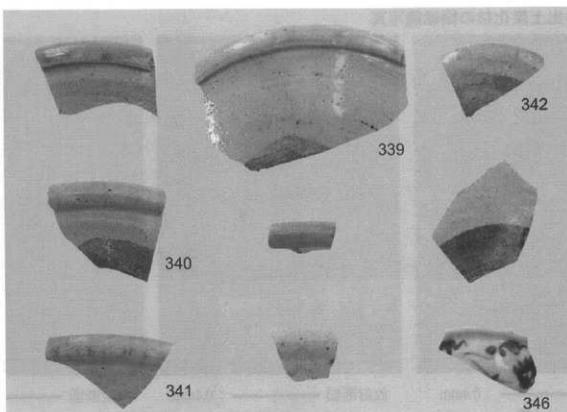


中世周溝墓出土鉄製品と砥石

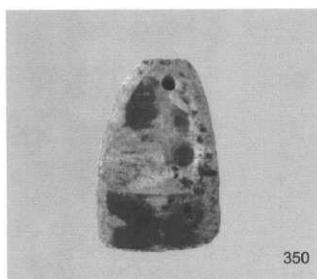


中世土師器

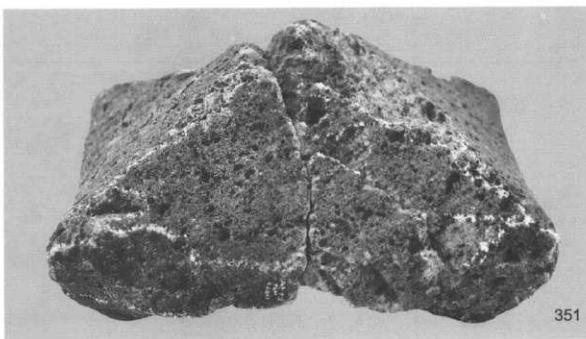
図版21



白磁・染付



滑石製品



軽石製品

## 図版22

5号住居跡出土炭化材の顕微鏡写真



横断面 ━━━━ : 0.4mm  
No1695 ネムノキ

放射断面 ━━━━ : 0.4mm

接続断面 ━━━━ : 0.2mm

古環境研究所撮影

都城市文化財調査報告書第49集

## 池ノ友遺跡（第1次調査）

2000年3月31日

編集 宮崎県都城市教育委員会

発行 〒885-8555 宮崎県都城市姫城町6街区21号  
TEL (0986) 23-9547 FAX (0986) 24-1989

印刷 有限会社 都城新生社印刷

〒885-0004 宮崎県都城市都北町7284-1  
TEL (0986) 38-3500 FAX (0986) 38-4187